

憲政 党神奈川 県支部の 内訌および分裂について

～田野倉仙蔵の日記資料を中心に～

乾 照 夫*

1. はじめに

明治31（1898）年6月に成立した憲政党内閣（隈板内閣）は、我が国最初の政党内閣として輝かしい第一歩を踏み出したにもかかわらず、内閣・党内部での自由・進歩両派による抗争の激化から、わずか4ヶ月にして崩壊した。この間、自由・進歩両派の対立は、地方支部においても顕著となり、役員人事・議員候補者選出等の問題をめぐって紛糾し、ついには支部組織の分裂といった事態にまで発展している。

そもそも、犬猿ただならぬ自由・進歩両党に合同する動きが出てきたのは、第3次伊藤内閣が解散をも辞さずと地租増徴案を提出した第12特別議会（5月19日開会・6月10日解散）の頃である。その動きも当初にあっては両党人士の会談が先行するかたちであったが、やがて両党幹部の交渉がすすむにつれて、政党内閣樹立の構想のもとに両党提携する動きとなり、さらに議会の解散と同時に「臨時総選挙には前代議士を候補者に推選する事」とする両党合同の条件がむすばれたうえで、新党・憲政党の結成を見るにいたっている¹⁾。

かかる動きに対して憲政党地方支部の設置が本格的となるのは同年7月に入ってからであるが²⁾、そうした中でまず第一に起こったのは支部役員人事をめぐる問題であったと考えられる。それというのも、従来さまざまなかたちで抗争を繰り返してきた自由・進歩の両派が、それ

までの悪感情を棄てて「合同の実」をあげるには、何より役員人事の調整で融和をはからねばならず、またその調整いかんでは融和を欠き、再び抗争を誘引するだけの可能性がじゅうぶんにあったからである。しかも、各府県において自由・進歩両派が互角であればともかく、多くの場合、両者には優勢・劣勢の関係があり得ただけに、必然的にそのどちらかが人事の実権を握り、それに対して一方が反発するといった事態となる。また、これによって支部組織内部における両派の対立感は一層深まる事態もあり得る。

そうした中でさらに深刻であったのは、第6回臨時総選挙（8月10日実施）に向けて出された「我党候補者はなるべく前代議士を推選する事」³⁾といった憲政党の方針に対する地方党員の対応の問題であろう。いうまでもなく、地方においては在来の地域社会があり、その複合したかたちとして地方政界なるものが形成されているわけで、その中に「前代議士」⁴⁾（あるいはその党派）の利益のみを保証した党の方針が降りてきたとなると、反「前代議士」派では自派の利害に直接かわるだけに、党の方針を遵守するか、あるいは自派候補者を擁立するかの二者択一を迫られる事態となる。そして、その結果、自由・進歩を問わず自派の候補者を推し立てて「前代議士」に対抗するといった動きも出てくる⁵⁾。

かくして以上のような問題が起こると、まず

* 東京情報大学講師

地方支部が問題解決にあたり、またさらにそれが党紀にかかわる重要問題であれば、党本部での裁断によって事態收拾がはかられねばならなかったと見られる。これによって、地方支部はもちろんのこと、総選挙で総指揮にあたる憲政党本部にあっても、その責任は問われるべきであったと思われる。

本稿では、以上のような点をふまえて憲政党神奈川支部の問題をとりあげ、さらにそうした地方の問題が投げかけた政界への影響と結果についても述べてみたい。なお、そこで筆者は当時、神奈川支部幹事の任にあった田野倉仙蔵(自由派)の日記資料⁶⁾を主として用い、それに『憲政党々報』と『東京新聞』(自由派)・『毎日新聞』(進歩派)等をも参照して憲政党神奈川支部における事件の経過についてもあきらかにしてゆきたい。

田野倉仙蔵の出自・経歴に関しては既にその紹介⁷⁾があるので、ここでは田野倉仙蔵という一人物を神奈川支部幹事または同県自由派の幹部として把握するにとどめる。また、その点からいえば本稿では田野倉仙蔵＝自由派の視点に偏するという一方の問題も出てくるが、そのことについてはそれとは対置的地位にあった『毎日新聞』の記事をも検討しながら事実関係をとらえてゆくこととする。

2. 憲政党神奈川支部の成立

明治31(1898)年6月、第12特別議会において伊藤内閣提出の地租増徴案を圧倒的多数で否決した自由・進歩両党は、これを機に「在野党大合同」の機運を大いに盛り上げ、数次の交渉と懇親会をもった後、党を同時に解散し、ついに新党・憲政党を結成するにいたった⁸⁾。

神奈川県では6月22日の憲政党結党式を前にして、自由党武相支部と進歩党神奈川支部の双方が合同問題について、それぞれ「当支部は自由進歩両党の合同を可決す」(自由党武相支部)・「進歩自由両党を合同し、藩閥打破の大政

賛成を表する事」(進歩党神奈川支部)⁹⁾と決議している。

また、神奈川県有志者の動きが顕著となるのは、板垣・大隈両党首を招待した6月16日の同志大懇親会(江東中村楼にて開催)に、山田泰造・梶野敬三・安藤亀太郎(いずれも自由党代議士)や戸井嘉作(進歩党県支部幹事)等が出席した頃¹⁰⁾からであるが、憲政党支部結成の動きが具体化したのは7月はじめであった。

「七月九日支部の発会式を挙げ、是より先き同月二日同県有志会を横浜市新松楼に開き旧自由進歩両派中より委員として永島亀代司、小島貞雄、中村得治、蜂須賀又次郎、露木要之助、矢野祐義、皆川広^(マツ)斎、菊池小兵衛、鈴木福松、持丸兵輔の諸氏を挙げて支部設置に関する諸般の準備をなさしむ、右委員協定の上七月九日をトして発会式を戸塚町鎌倉倶楽部に挙行す¹¹⁾」

7月2日の「神奈川県有志会」では、表1に示したように、自由・進歩両派から各地の有志者5名ずつが創立委員として選出されているので、ここにおいては両派對等の立場に立って支部創立の準備に取り組んでいたことになる。もっとも、これを自由派だけに限ってみると創立委員がすべて郡部出身(郡部自由派)であることから、人選から漏れた横浜地域の自由派(支部自由派)とのあいだには歩調の違いがあったと見られる。

さて、以上のように自由・進歩両派が対等の立場で支部創立の準備に取り組むとなると、つぎに両派から支部発会式に充てる資金をどれだけ出すかが、問題となる。表2によると、創立委員のうち自由派では蜂須賀又次郎・永島亀代司の両名が、進歩派では矢野祐義が資金調達を担当し、その集金額は自由派が120円、進歩派が75円となっており、両派のあいだには45円ほど集金力の差があったことがわかる。このことは、当初両派對等の立場で進行していたはずの発会式準備が、その内実においては自由派の優位で進行していたことを物語っている。

やがて7月9日、憲政党神奈川支部の発会

表1. 憲政党神奈川県支部の創立委員

派	氏 名	出身地	主 な 経 歴
自由派	小 島 貞 雄	都筑郡	自由党武相支部幹事 (明27-28)
	中 村 得 治	愛甲郡	自由党武相支部代議員 (明27-31)
	永 島 亀代司	久良岐郡	神奈川県青年会幹事 (明30-31)
	蜂須賀 又次郎	高座郡	神奈川県青年会幹事 (明26-31)
	露 木 要之助	鎌倉郡	神奈川県青年会幹事 (明27-28)
進歩派	菊 池 小兵衛	高座郡	改進黨神奈川県支部創立委員 (明29)
	矢 野 祐 義	横浜市	進歩党神奈川県支部代議員 (明30-31)
	皆 川 広 済	横浜市	進歩党神奈川県支部代議員 (明30-31)
	持 丸 兵 輔	橘樹郡	進歩党神奈川県支部代議員 (明30-31)
	鈴 木 福 松	三浦郡	進歩党神奈川県支部評議員 (明30-31)

注. 『自由』〔自由党機関紙〕M26.6.27、『新潮』〔神奈川県青年会機関誌〕第1号、同第13号、同第18号、同第35号、『自由党党報』第147号、『立憲改進黨党報』第52号、『進歩党党報』第13号、『憲改黨党報』第3号等により作成。

表2. 支部発会式費用（入金分）の内訳

入 金 者	自 由 派	進 歩 派
蜂須賀 又次郎	7 0 円	
矢 野 祐 義		4 0 円
永 島 亀代司	5 0 円	
進歩派負担金 (矢野入金)		3 5 円
計	1 2 0 円	7 5 円

注. 1) 『田野倉仙蔵日記』により作成。

2) 本表は支部創立委員が集めた発会式費用のみを対象とした。

式が鎌倉郡戸塚町（現在の横浜市戸塚区）の鎌倉倶楽部において挙行された。この発会式自体は型どおりごく平穩に進行したようであるが、後段の支部総会では役員選出をめぐる自由・

進歩両派が鋭く対立する場面があった。ここでまず、発会式のもようを見てみよう。

「当日来会する者参百九名東京本部よりは鳩山和夫、江原素六、大井憲太郎の三氏臨席す、中村得治氏起て委員を代表して開会の主意を述べ終て齊藤満三氏を座長に推さんことを求めしに満場異議なく之に賛同す、即ち齊藤氏座長席に就き支部の規約を議せしに悉く原案に可決確定せり、終りて奏樂三次 天皇陛下万歳憲政党万歳神奈川県支部万歳を三唱し次て祝電祝文の朗読に引き続き来賓鳩山、江原、大井三氏及前代議士島田、徳増両氏の演説あり¹²⁾」

支部発会式は、以上のように終わり、小休憩のあと間もなく支部総会に移り、支部役員選挙がおこなわれた。そのもようを、田野倉仙蔵の

『憲政党神奈川県支部日誌』（以下『支部日誌』と略す）から見てみよう。

七月九日 戸塚町鎌倉倶楽部ニ於て憲政党
神奈川県支部発 開 式於挙行ス。

全日 規約十九条於決議し幹事及常議員を
選挙す。

常議員四拾参名の内、八名未定。

幹事五名の内、壹名未定。

幹 事

中村 得治 宮田 寅治 飯田 彰重
田野倉仙蔵

常 議 員

平沼九兵衛	永島亀代司	黒部 熊吉
井田 文三	持丸 兵助 ^(マツ)	青木豊十郎
鈴木宗之助	内田重太郎	及川新兵衛 ^(マツ)
露木要之助	青木 勝蔵	柏瀬権次郎
金子角之助	蜂須賀又次郎	桐生増兵衛
山宮 藤吉	真板和五郎	石川 淑 ^(マツ)
橘川文次郎	近藤市太郎	福井 準三 ^(マツ)
大貫 弥七	梅原 良	岡部芳太郎
天野 藤三	安藤 安賀	吉田清太郎 ^(マツ)
小沢 衡平	長谷川勝五郎	中田 寿一 ^(マツ)
鈴木忠兵衛	石渡 義	新倉 豊吉
小泉又次郎	柳下八 良 ^(マツ) 兵衛	

右参拾五名。

ここに選出された役員35名は、表3に示すごとく、幹事・常議員ともすべてが郡部出身者であった。したがって横浜市側の顔触れがまったくないという点が特徴的である。このことは7月9日の支部総会が郡部側の主導のもとにすすめられていたか、あるいは横浜市部での役員人選が進捗していなかったことを示すものであろう。

そこでまず、選出された幹事の顔触れを見ると、自由派は中村得治（愛甲郡・前県議）・宮田寅治（中郡・元県議）・田野倉仙蔵（津久井郡・前県議）の3名であるのに対して、進歩派は飯田彰重（橘樹郡・元県議）の1名のみとなっている。進歩派の証言によると、この選挙においては自由派3名・進歩派2名の幹事が選任される予定で、そのうち進歩派から飯田彰重と戸井

嘉作（横浜市・旧進歩党支部幹事）の2名が推選されたが、自由派は戸井嘉作の就任には反対し、その結果、ひとまず戸井を除いた幹事4名が選出されたのだという¹³⁾。

それに対して常議員の選挙では、横浜市部8名の選出はおこなわれず、郡部側の35名が選出されている。このうち横浜市部8名の選出については、おそらく残る幹事1名の選出とともに後日の検討課題として扱われたものと思われる。

7月9日の支部総会は、このように自由派（郡部自由派）の主導でおこなわれ、しかも支部役員人事の課題を残して散会するところとなった。

これにより憲政党神奈川県支部（横浜市初音町1丁目16番地¹⁴⁾）では発足早々、役員補欠選挙を処理すべく、臨時大会をいつ挙行すべきかの話し合いがなされた。『支部日誌』によると、7月11日の第1回幹事会（横浜市太田町伊藤屋で開催）では「来ル十八日臨時大会を開く事」と「大矢正夫を事務員となす事」の二項を決めたが、その翌日、進歩派幹事の飯田彰重から大会延期の要求があったので「七月廿二日戸塚に於て開会 事と決す^(マツ)」ることとなった。

かくして7月22日、神奈川県支部臨時大会は戸塚町鎌倉倶楽部において開催、まず役員補欠選挙をおこない、幹事1名・常議員8名を選出した。

七月廿二日

鎌倉倶楽部に於て支部臨時大会を開く。

出席者壹百拾六名。

第一 幹事一名の補欠選挙を行ふ。
座長齊藤氏指名の事と決し菊池小左衛門氏と決す。

第二 常議員八名の補欠選挙をなす
座長齊藤氏の指名と決し、其指名ハ
脇沢金次郎 黒部 与八 小川 弥七
千原 正義 矢野 祐義 関島宇兵衛
二見友三郎 海老塚徳三郎
右八名と決す。

第三 常議員会を開く

出席者廿四名小沢衡平氏を議長とす。同会
会則七ヶ条を議了し及同部経費収支決算を

表3. 神奈川県支部役員の顔ぶれ(7月9日選挙分のみ)

	自由派			進歩派		
	氏名	出身地	地位	氏名	出身地	地位
幹事	中村得治 宮田寅治 田野倉仙蔵	愛甲郡 中郡 津久井郡	前県議 元県議 前県議	飯田彰重	橘樹郡	元県議
常議員	永島亀代司	久良岐郡	前県議	平沼九兵衛	久良岐郡	元県議
	黒部熊吉	"	県議	井田文三	橘樹郡	県議
	柳下八郎兵衛	橘樹郡	県議	持丸兵輔	"	元県議
	青木豊十郎	"	元県議	笈川新兵衛	都筑郡	元県議
	鈴木宗之助	都筑郡	県議	青木勝蔵	鎌倉郡	町長
	内田重太郎	"	県議	山宮藤吉	高座郡	村助役
	露木要之助	鎌倉郡	元県議	石川淑	愛甲郡	村議
	柏瀬権次郎	"	書籍商	小泉又次郎	三浦郡	新聞記者
	金子角之助	高座郡	(不明)			
	蜂須賀又次郎	"	村長			
	桐生増兵衛	"	村長			
	橘川文次郎	愛甲郡	県議			
	近藤市太郎	中郡	県議			
	福井準造	"	(不明)			
	大貫弥七	"	県議			
	梅原良	"	銀行頭取			
	岡部芳太郎	津久井郡	県議			
	天野藤三	"	元県議			
	安藤安賀	足柄上郡	県議			
	吉田清太郎	"	元県議			
	小沢衡平	足柄下郡	元県議			
	長谷川勝五郎	"	村長			
	鈴木忠兵衛	三浦郡	町議			
	石渡義	"	(不明)			

党派不明

真板和五郎	愛甲郡	(不明)
中田寿一郎	足柄下郡	町議
新倉豊吉	三浦郡	(不明)

注. 本表は田野倉仙蔵『支部日誌』、『憲政
党党報』第3号、『新潮』第1号、同第
18号、同第19号、『立憲改進黨党報』第
52号、『進歩党党報』第13号、森久保平
三郎編『神奈川県名譽職員録』
(1897)、『神奈川県史』別編1〔人物〕
(1983)等により作成した。

議決す。

(『支部日誌』)

この臨時大会の出席者116名は、7月9日支部
発会式の来会者309名に比べて4割弱にすぎず、
県下有志者の支部役員人事に対する関心が意外
に薄かったことを物語っている。かかる状況で、
座長斉藤満三の指名によって補欠選挙がおこな
われたが、進歩派の証言によると、そのとき市
部自由派の鈴木稲之輔(県会議長)が壮士20余
名を率いて「会長指名権を蹂躪するの行動をな
す」ところとなり、それに乗じて自由派は旧進
歩派県支部幹事の戸井嘉作をしりぞけ、かわり

に進歩派郡部の重鎮・菊池小兵衛(元県議)を
選出したのだという¹⁵⁾。

ついでおこなわれた常議員補欠選挙(横浜市
部8名選出)では、自由派から脇沢金次郎(県
議)・黒部与八(元県議)・小川弥七(医師)・千
原正義が、また進歩派からは矢野祐義(市議)・
関島宇兵衛(県議)・二見友三郎(弁護士)・海
老塚徳三郎(会社経営)がそれぞれ選ばれた。
これにより自由・進歩がそれぞれ4名選出され
たわけであるから、ここでは異議が出なかった
ものと思われる。

田野倉仙蔵の日記資料によると補欠選挙は以

上までであるが、支部会計監督3名の選挙もおこなわれた。この会計監督の選出については、進歩派の証言によると、進歩派幹事2名の代償として「会計監督3名も内2名は旧進歩派より、一名は旧自由派より選出の筈」¹⁶⁾であったというが、結局、自由派の力がまさったかたちで、自

由派から栗原宣太郎（中郡・県議）・露木要之助（鎌倉郡・元県議）の両名に対して、進歩派からは水越良介（高座郡・松林村々長）のみが会計監督に選出された¹⁷⁾。これにより会計監督3名の内訳は自由派2名・進歩派1名となり、しかもそのうちの露木要之助は常議員との兼任でもあ

表4. 神奈川県支部役員の党派別構成

		自由派	進歩派	党派不明
幹 事		3	2	—
常 議 員	横浜市	4	4	—
	久良岐郡	2	1	—
	橘樹郡	2	2	—
	都筑郡	2	1	—
	三浦郡	2	1	1
	鎌倉郡	2	1	—
	高座郡	3	1	—
	愛甲郡	1	1	1
	中 郡	4	0	—
	津久井郡	2	0	—
	足柄上郡	2	0	—
	足柄下郡	2	0	1
	(計)	(28)	(12)	(3)
	会計監督	2	1	—
総 計		33	15	3

注. 表3と同じ資料を用いて作成した。

ったので、自由派はここにおいても自派の優位を貫徹させ、たとえ会計監督たりとも譲歩できないという、断固たる意思を示した。

かくして、支部役員選挙は紛糾したかたちで終始したものの、ここに一応の決着がついたことで、支部役員を軸とした指導体制が成立したこととなる。そこであらためて表4によって、支部指導部の構成を見てみると、幹事・常議員・会計監督ともに自由派が過半数を占めて優位に立っていたことがあきらかとなる。中でも幹事・会計監督については既に指摘したとおり、自由派が進歩派を圧倒したかたちとなっており、一方の常議員についても横浜市を除いて、郡部では自由派が進歩派を圧倒していたことがわかるのである。おそらく、それには当時の県下における「旧自由1,292名、旧新^(マツ)歩432名」(田野倉仙蔵『支部日誌』による)といった力の関係がはたらいていたであろうから、進歩派としては不満ではあっても、自由派に対して譲歩せざるを得なかったものと見られる。

7月22日の臨時大会では、この他に第1回常議員会が開催されたことも見のがすことはできない。この会には前掲『支部日誌』の記事によれば、総員43名のうち24名が出席していたのみであることから、当初から不人気であったことがわかる。議事において、まず自由派の小沢衡平(足柄下郡・元県議)が議長に推され、そのあとに常議員会々則と支部経費収支予算が議決された。

ここで、図1に示した支部経費収支予算のうち《歳入》の部を見ると、支部歳入予算のうちで最も多く寄付金を求められたのが代議士の額1,000円で、これが全体の約55パーセントを占めている。さらに、その額を1人当たりに換算すると、所属代議士は5名であったから、各代議士は全体の約11パーセントにあたる200円を負担しなければならなかった。これは、県会議員1人あたりの負担額10円(全体の約0.55パーセント)と比較してみると、極めて過酷な負担であったといえる。

ここに代議士の高負担があきらかになると、

県議や「有志者」と呼ばれる党員は代議士の寄付のしかたを見て、みずからの対応を決めようとする事態ともなる。しかも、そうした中で、有志者の寄付額については全額500円とは決まっていたものの、第1回常議員会では欠席者が多かったので、各郡・市ごとの割り当てはまだおこなわれていない状態であった。したがって、この時点にあっては代議士・県議に対して負担額が決定していても、有志者の寄付については何ら具体的な案がなかったことになるのである。

3. 第6回総選挙と「前代議士再選」問題

神奈川県支部の発足に先立つ7月5日、憲政党本部では、選挙委員36名が第6回臨時総選挙(8月10日実施)について協議した結果、

一 我党候補者はなるべく前代議士を推選する事

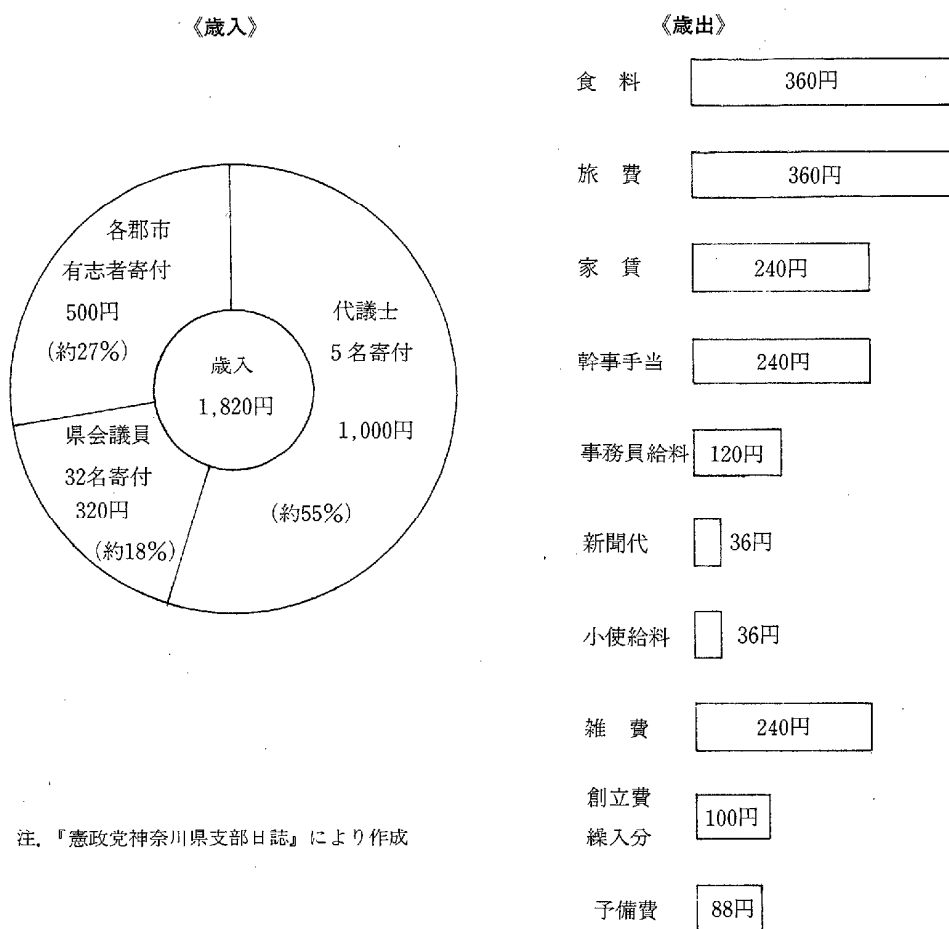
一 各地方に於て速かに候補者を定め本部に届出てしむる事

等の五項目を決定した¹⁸⁾。党本部は、これにより7月10日から約1週間のあいだ、遊説員(党役員・代議士)を東北・関東・東海・近畿・山陰・山陽・四国・九州の各地に派遣し、党の選挙方針の説明にあたらせていた¹⁹⁾。

しかし、かかる党の方針に対して、地方党員には自由・進歩派それぞれ既存の「地盤」があり、またさまざまな抗争を繰り返してきた経緯があるだけに、それまでの対立候補を支持することについてはかなりの抵抗感があったと見られる。したがって、そうなる実際の選挙では、地方党員のあいだに、党の方針に反して対抗候補を立てる動きも、当然のことながら出てくる。これについて旧進歩党系の『毎日新聞』は、つぎのような見解を示している。

「今日の選挙に対する同党(憲政党一引用者注)の一般方針は、今更ら協議する迄もなく疾く合同の際に於て、進歩自由両党員は互に援助して前代議士の再選を努むる事との申合規定に準拠するより外なきを以て、万一各地方中是の申合せを破り同志相争ふ

図1. 神奈川県支部の明治31年度予算



注、『憲政党神奈川県支部日誌』により作成

場合には、何にか制裁にても加へんかの如き感想を有する者あるも、聞く処に拠れば斯かる場合に際しても同党は別に干渉も試みず制裁も加へず、成る可く地方の自治に一任して調和を謀らしむる筈なりと云ふ。」

(『毎日新聞』M31.6.26)

右の文中にある「申合規定」とは、さきの憲政党結成時に自由・進歩両党の合同条件としてあきらかにされたもので、これには第12特別議会の解散といった事態も手伝い、両党所属の「前代議士」はこぞって賛成した経緯がある²⁰⁾。それ

だけに、解散後の総選挙をたたかう「前代議士」にしてみれば「進歩自由両党員は互に援助して前代議士の再選を努むるとの申合規定」は好都合このうえなく、またその対抗候補者にしてみれば、これにより極めて不利な条件が突きつけられたとして、「申合規定」を無視するか、あるいは拒否してたたかうかが予想される。そこで党本部では、そうした事態への対応策として何らかの制裁措置を準備しておくべきであったろうが、その準拠するところが「申合規定」であればおのずと拘束力が弱く、その点ではむしろ

地方支部に一任して、地域の実情に応じたかたちで調停させ、違反者には道義的責任を求めるほうが、より实际的で有効な方法であるとの認識に立っていたと考えられる。

憲政党本部が、以上のような点から「別に干渉も試みず制裁も加へず、成る可く地方の自治に一任して調和を謀らしむる」こととなれば、同党の地方支部ではその意を体して、支部役員が各選挙区をまわり「前代議士再選」で一本化するように指導しなければならない事態となる。本稿で扱う神奈川県支部でも、7月半ばより、支部幹事が各選挙区をまわり指導にあたっているが、それぞれが既存の「地盤」のうえに抗争を展開してきた土地柄だけに、地域に根ざした党派の障壁は容易に崩せるものではなかった。

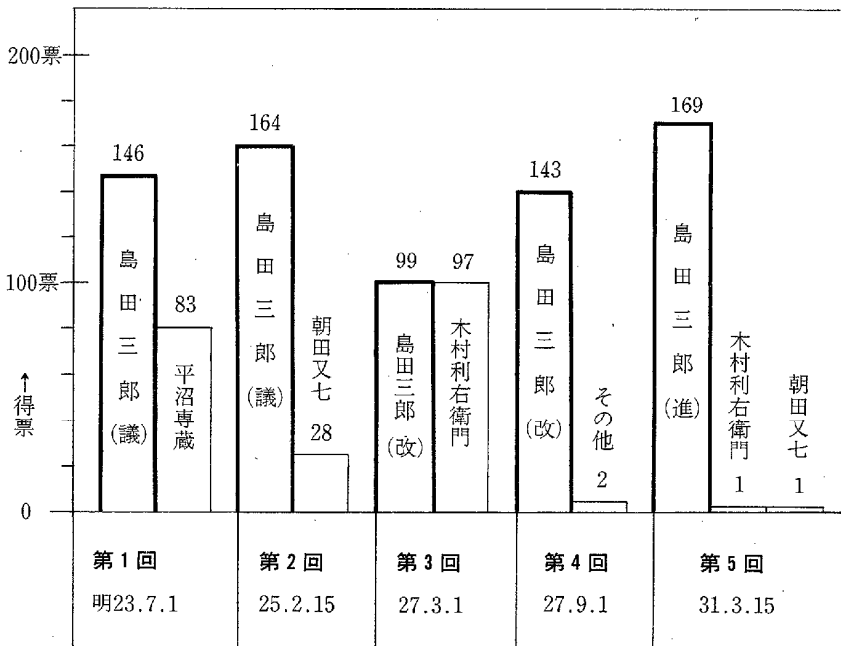
その点ではむしろ支部役員が候補者選定会に出席して調整にあたったというのが実状であったように思われる。

そこで当時、神奈川県下の各選挙区がどのような形勢にあったのか、またそうした中で「前代議士再選」の方針が果して遵守され得るものであったのかを、以下に見てゆきたい。

(1) 神奈川県第1区（横浜市）

神奈川県第1区は、図2に示したように、第1回総選挙以来、島田三郎（毎日新聞社社長）が連続5回の当選を果たした、自由党の強い神奈川県では唯一の進歩党地盤であった。だが、そうしたあり方に対して反島田勢力のあいだに

図2. 神奈川県第1区・総選挙の変遷



注1) 江川喜太郎『政戦録』(1925)により作成。

注2) 図中カッコ内の漢字は党派・政党を示す。

例 〈議〉議員集会所、〈改〉立憲改進黨、〈進〉進歩党、〈自俱〉自由倶楽部、
 (弥) 弥生倶楽部、(自) 自由党

は対抗候補を推す動きもあり、島田派陣営としては樂觀できない状態があった²¹⁾。

ことに第6回総選挙にあつては、明治29(1896)年2月の勅令第263号により——従来府県税であった営業税は直接国税に移管され——横浜市内では直接国税15円以上の選挙人資格者(有権者)が前回総選挙の276名から721名に飛躍的に増加したという好条件があつて²²⁾、これを好機として立候補を目論むものがあつたとしても不思議ではなかった。

さてそこで、以上のような状況から島田三郎に対抗して立候補するには、新有権者たる中小商工業者から支持される「実業家」のイメージが求められ、また東京在住の島田に対して地元出身の強みを強調すること等が要件となった。このとき「横浜市実業家一同」から推選された自由派の鈴木稲之輔(県会議長・煙草商)は、まさにこのような特徴を前面に据えて立候補したのである²³⁾。

神奈川県支部では、幹事宮田寅治が、かかる動きに対して「前代議士再選」の方針をもって、立候補の辞退と運動の中止を申し入れた。しかしながら、鈴木は出馬の意志が固く、ついに交渉を打ち切るまでとなった。その交渉経過は、つぎのとおりである。

八月一日

鈴木稲之輔氏ヲ第一区衆議院議員候補者に推選シタル旨届出。

八月二日

宮田寅治氏を以て鈴木候補者運動中止を申し込む。

黒部与八、脇沢金次郎両氏より有志総代の名義にて鈴木氏を候補者に推選シタ旨届出ル。

八月三日朝

鈴木氏を津久井(旅館「津久井屋」一引用者注)に招き、徳義上候補を辞退セラルベシト申入ル。同氏ハ到底底止マリ難キ旨申募リ居ルヲ以て談判を中止す。

(『支部日誌』)

神奈川県第1区では、これにより「前代議士」

島田三郎(進歩派)と鈴木稲之輔(自由派)との一騎打ちとなり、新聞紙上でも島田・鈴木両派が論陣を張り、激しい攻防戦を展開するところとなった。だが、そうした選挙戦の中では「前代議士再選」は争点とはならず、むしろ、明治32(1899)年の改正条約実施後には実業振興のために「実業家的代議士」が必要であるという議論(鈴木派の主張)や、代議士選挙の標準は候補者の学識・人物・名望・経験等にあり職業で選ぶべきではないという議論(島田派の主張)が争点となった²⁴⁾。その意味では、鈴木・島田両派ともそれぞれの主張を軸として、急増した新有権者層(中小商工業者)をどう取り込むかに力点をおいたものと思われる。

やがて選挙戦も終盤になると、横浜市の経済・政治に影響力をもつ地主層・貿易商の二大勢力、すなわち「地主派」²⁵⁾と「商人派」²⁶⁾の帰趨が問題となった。とりわけその中でも、新人候補の鈴木稲之輔に対して「地主派」の支持がどれほどの見込まれるかが1つの焦点となり得た。この場合、それまでの経緯から「商人派」は進歩派を支持し、「地主派」は自由派を応援する形勢にはあつたものの、最終的には候補者の「人物」によって左右されたと見られる。

選挙投票日の地元新聞は、当時の「地主派」の動きを、つぎのように伝えている。

「鈴木派に賛成すべき筈の原善三郎、若尾幾造、其他木村利右衛門、渡辺福三郎及平沼専蔵等の諸氏は両候補者の人物を知り抜いて居るに拘らず、何故か棄権の意ありとの噂あり。」

(『横浜貿易新聞』M31.8.10)

この記事は島田派側から鈴木派の不利を宣伝するためのものであつたともいえるが、上記「地主派」の人々はすくなくとも「実業家」である点においては、鈴木以上の資格²⁷⁾があるだけに、その心中は複雑なものがあつたというべきであろう。また、木村利右衛門(蚕糸仲買商)や平沼専蔵(洋糸織物仲買商)は、図2にも見られるとおり、既に立候補(いずれも落選)の経験があるだけに、それぞれ鈴木とは同調しにくい

事情があったとも思われる。上掲の記事は、おそらくそうした「地主派」の内情を見抜き、鈴本派との間隙を巧妙に衝いたものといえるだろう。

そうなると鈴本陣営は、かかる状況を打開するために最終手段として壮士を動員して強力な選挙運動に訴えざるを得ない。しかしながら、そのような強行手段に訴えれば、中にはそれを恐れて投票日には棄権する有権者もあらわれ、かえって逆効果ともなり得たともいえるだろう。地元新聞は、そうしたようをつぎのように述べている。

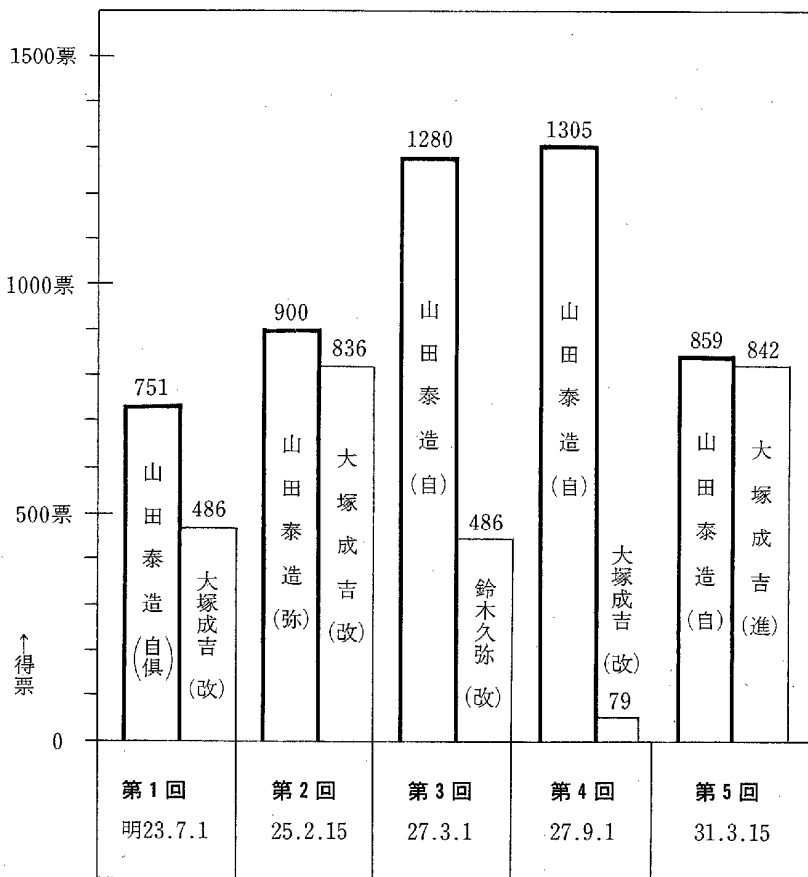
「鈴本派にてハ否が応でも逃さじと血眼になりて掛かり居るにより、虎口に陥りたる有権者は昨夜より本日へ掛け用に托して他行せる向も多く、是れ等ハ無論棄権するならんと。」

(『横浜貿易新聞』M31.8.10)

(2) 神奈川県第2区(久良岐郡・橘樹郡・都筑郡)

神奈川県第2区は、第1回総選挙以来、旧自由・進歩(改進黨)両党の激戦区であった。とりわけ前回の第5回総選挙では、図3に見られる

図3. 神奈川県第2区・総選挙の変遷



注. 江川喜太郎『政戦録』(1925)により作成。

ように、自由党の山田泰造（前代議士・弁護士）と進歩党の大塚成吉（弁護士）が17票の僅少差で勝敗を決しただけに、第6回総選挙にも大塚が立候補するとなれば、激戦は必至であった。

7月17日、第2区候補者選定会が橋樹郡神奈川町（現在の横浜市神奈川区）の柏屋で開かれ、各郡の村々より2～3名の有志者が出席して都合9名の選定委員を選出、これにより選定委員は別席にて協議に入った²⁸⁾。このときの選出委員は、表5に示したように、久良岐・橋樹・都筑各郡の元県議・県議等であり、これを党派別に見ると自由派5名に対して進歩派4名となり、自由派が1名差でわずかに有利といった形勢であった。

だが、この選定委員会の冒頭で「前代議士再撰の議」が提議されると、委員2名が賛成したのに対し、残る7名が反対して否決される事態となり²⁹⁾、また、それに反対した委員7名も、大塚成吉支持が4名、他候補者擁立が3名と分かれたために、結局、この選定会では候補者未定のまま終会となった³⁰⁾。

神奈川支部では、これに対して7月22・23の両日にわたり、選定委員に「前代議士再選」を申し入れ、また説得にあたったが、進歩派委員の拒絶によって、ついに交渉を打ち切らねばならなかった。つぎに掲げる『田野倉仙蔵日記』（以下、『田野倉日記』と略す）の記事は、選定

委員のうち自由派委員が「前代議士再選」を承諾したのに対し、進歩派委員がそれを拒絶したことを示している。

（七月）

全廿二日 支部臨時大会の為戸塚行。但（役員補欠選挙及常議員会）終て宮田、中村、飯田の三幹事同道。伊藤屋ニて第二区候補者選定委員を招き再選の事を交渉す。

旧自由派ハ来ル諾す。旧新^(マツ)歩派不来。

廿三日 旧新^(マツ)歩派持丸兵輔来ル拒絶す。

依而交渉不調とす。

（『田野倉日記』）

かくして神奈川県第2区では、「前代議士」山田泰造（自由派）と大塚成吉（進歩派）との戦いがまさに始まろうとしていたが、まもなく山田の立候補辞退で事態は急変、これによって自由派委員5名はただちに永島亀代司（元県議・銀行役員）を候補に立て、7月24日付で選挙区の有権者に「右は委員過半数の決議に仍り、此段及御通報候也」と通知したのである³¹⁾。

進歩派陣営は、ただちに自由派の挙を「虚妄欺誑の事を言触らして有権者を籠蓋瞞弄せんとしたる」（毎日新聞 M31.7.27）ものと主張した。また第2区進歩派委員は、党本部に自由派糾弾の抗議書を提出するにとどまらず、この事件を「尚ほ委員会的事実曲げて大塚候補の当撰を妨ぐる」選挙違反として告訴するにおよん

表5. 第2区候補者選定委員の構成

自 由 派			進 歩 派		
氏 名	出身地	地 位	氏 名	出身地	地 位
黒 部 熊 吉	久良岐郡	県会議員	平 沼 久 兵 衛	久良岐郡	元県会議員
柳下 八郎兵衛	橋樹郡	県会議員	井 田 文 三	橋樹郡	県会議員
青 木 豊十郎	〃	元県会議員	持 丸 兵 輔	〃	元県会議員
佐 藤 貞 幹	都筑郡	元県会議員	森 里 五 郎	郡筑郡	村収入役
鈴 木 宗之助	〃	県会議員			

注、森久保平三郎編『神奈川県名譽職員録』（1897年）、『毎日新聞』M31.7.27、『神奈川県史』別編1（人物）（1983）等により作成した。

だ³²⁾。

ここに、神奈川県第2区は「前代議士」立候補辞退によって、自由派は永島亀代司を、また進歩派は大塚成吉を立ててたたかうこととなり、いわゆる「同志相闘ぐの陋態」を現出する事態となった。しかしながら神奈川県支部では、既に「前代議士再選」が両派の争点とならなかったために介入するまでもなく、あとは両候補による決着にまかせる以外になかった。このことは、「同士打ち」といわれる選挙戦も、「前代議士再選」の枠が取り払われたことで、自由・進歩両派が従来のような抗争状態に入ったことを示している。

かくして神奈川県第2区で選挙戦がおこなわれると、永島・大塚両派とも前回総選挙同様あるいはそれ以上の接戦を想定して、有権者獲得のためのあらゆる戦術を駆使するところとなる。その中から運動員による買収等の違反行為も出てくるが、そうした事件は、のちに鈴木除名問題と重ね合わされて表出するので、後節で紹介したい。

(3) 神奈川県第3区（鎌倉郡・三浦郡）

神奈川県第3区は、図4に示したように、第1回総選挙以来、山田東次（当選3回）から徳増源太郎（当選2回）へと受け継がれた旧自由党の独占区であった。したがって神奈川県支部としてみれば、「前代議士」徳増源太郎に対抗して同じ自由派の有力候補者が出現しないかぎり、問題のないケースであったといえるだろう。だが、そうではあっても、山田東次・徳増源太郎がいずれも鎌倉郡出身であっただけに、三浦郡の自由派にあっては果してそれに協力できるかが課題であった。

7月17日、鎌倉郡戸塚町（現在の横浜市戸塚区）で開催された第3区候補者選定会には、神奈川県支部から幹事田野倉仙蔵や岡部芳太郎（県議）・亀井佐一（県議）が出向き、斉藤満三・石井仁左衛門（中和田村々議）・石井鎌之助（県議）ら鎌倉郡有力者と会談している。だが、そ

こには三浦郡有志者の名が見られない。

七月十七日

第三区候補者に関する件に付、岡部、亀井、自分（田野倉一引用者注）同道。戸塚町に到り、有志者斉藤老人、石井仁左衛門、石井鎌之助其他に面談す。

（『支部日誌』）

このとき三浦郡では、自由派有志者のあいだに「南北葛藤事件」³³⁾と称する一種の紛議が生じており、そうした中において候補者選定の問題はその解決の目処がつくかどうかにかかっていたようである。そこで、田野倉・岡部・亀井の3名は、7月18日から4日間にわたって三浦郡に出向き、北部の桐ヶ谷良吉（県議）・鈴木忠兵衛（横須賀町議）・青木兼吉（同町議）等と会い、さらに南部の鈴木安造（県議）・鈴木林蔵（元県議）等と交渉をもち、事態収拾に努めている。

七月十八日 岡部、石井、亀井同車にて三浦郡逗子行。桐ヶ谷、大忠、青木等を養神亭に呼ぶ。横須賀連来。

全 十九日 青木、大忠等来り会ス。亀井帰浜す。○午后長井に向ふ。大木根浜田屋泊り。鈴木安造氏を喚ぶ、直に来ル。

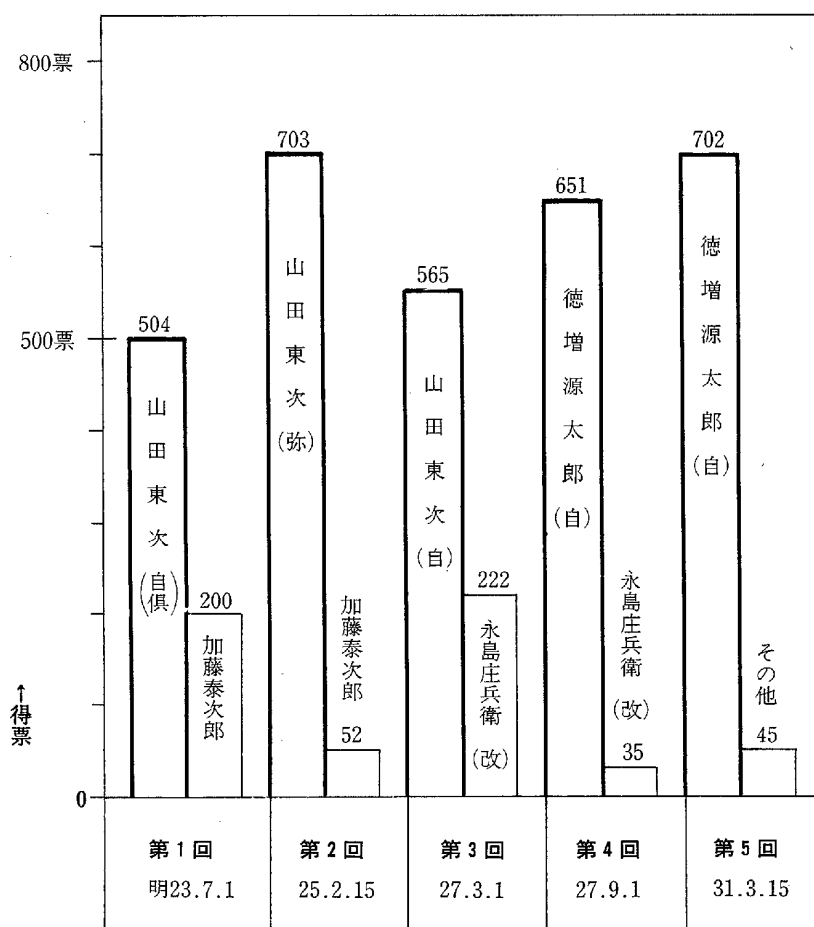
全 廿日 初声村役場に石渡を訪ふ。
人名石井、岡部、鈴安、桐ヶ谷、自分、又鈴木林蔵氏を訪ふ。三崎泊り。

全 廿一日 乗船逗子に至り、清水源右衛門と全停車場に出会。横須賀に向ふ。夕刻横浜に帰ル。

（『田野倉日記』）

これにより三浦郡における南北対立はひとまず収まり、あらためて同郡の有志者が「前代議士」徳増源太郎を推すかどうかの問題が浮上したが、このとき進歩派から伊東春義（元県議）が打って出る模様ではあったものの³⁴⁾、結局、自由・進歩両派とも対抗候補を出すまでにはいたらず、いわば「前代議士再選」を容認したかたちとなった。

図4. 神奈川県第3区・総選挙の変遷



注. 江川喜太郎『政戦録』(1925)により作成。

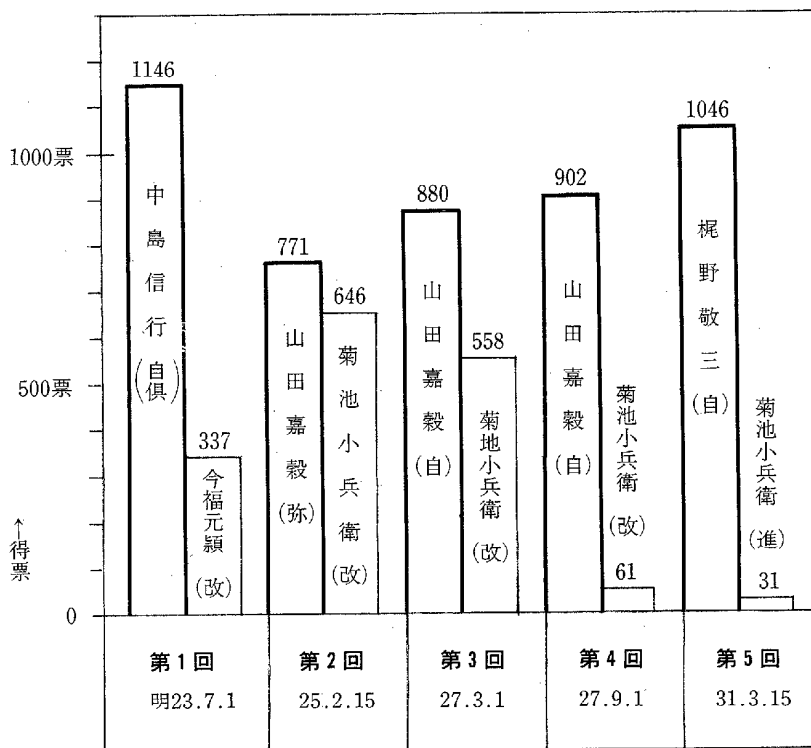
(4) 神奈川県第4区(高座郡・愛甲郡・津久井郡)

神奈川県第4区は、図5が示すように、第1回総選挙以来、旧自由党の独占区である。それだけに、前回当選した自由派の梶野敬三が「先ず敵なし」(『東京日日新聞』M31.7.22)といわれる状況であった。だが、それにもかかわらず、進歩派は自由派の「仏国法律博士」神藤才一³⁵⁾に白羽の矢を立て、これにより自由派の切り崩しをはかった。

第4区の進歩派は高座郡南部(現在の茅ヶ崎市など)を根拠地として愛甲郡厚木町(現在の厚木市)にも勢力を伸ばしていたものの、他の地域では自由派に圧倒されていた³⁶⁾。それだけに進歩派では、かかる形勢をはねかえすためにも、高座郡北部(現在の相模原市)に拠点をおく神藤才一を擁立すれば、津久井郡に拠点をおく梶野敬三に対して、高座郡南部—愛甲郡厚木町—高座郡北部と連なる「旧自由党分断構想」が実現し得ると見たのであろう。

7月23日、高座郡海老名村(現在の海老名市)

図5. 神奈川県第4区・総選挙の変遷



注. 注川喜太郎『政戦録』(1925)により作成。

総持院で開催された第4区候補者選定会では、「前代議士」梶野敬三を推す者と神藤オーを推す者が出たことから、7月28日に再度選定会をおこなうことを決めて散会した³⁷⁾。これにより第4区候補者問題は県支部・党支部に持ち込まれ、梶野派・神藤派との調整がおこなわれたうえで、7月27日に支部幹事田野倉仙蔵を加えて大詰めの交渉がもたれた。

(七月)

廿七日 藤沢駅つ多や(葛屋一引用者注)に於て金子小左衛門、山宮藤吉、自分(田野倉仙蔵一同注)、志村大輔及樋口(要助一同注)と徴夜交渉(神藤ハ后十二時過來ル)。

一金 壹円也 ○茶代。

廿八日 神藤利七を加へ同道、厚木町に至

る。

一金六十四銭汽車 ○藤沢より厚木迄車
二円程小休及車代 代及内河茶代

(『田野倉日記』)

7月27日の交渉は上掲の記事ではあきらかではないが、同席した進歩派の山宮藤吉(高座郡鶴嶺村助役)の日記に「金子氏ト共ニ神藤氏候補退議勧告ヲナス」³⁸⁾とあるから、山宮も自由派の金子小左衛門(元県議・同郡明治村収入役)とともに神藤に立候補辞退を勧告していたことがわかる。この時点で、高座郡南部の進歩派が神藤候補擁立を取り下げたために、あとは高座郡北部・愛甲郡各有志者が果して神藤擁立説を支持するかが焦点となった。以下、山宮藤吉の日記から7月28日のものをうかがうこととする。

七月二十八日 梶野方厚木町万年屋、神藤方三浦屋ニ会ス、愛甲郡橋川文次郎氏ノ派神藤氏退讓不可説ヲ持ス、高座北部自由党ノ賛成薄キガ為メ愈々神藤氏退讓ノ事ト決ス³⁹⁾

(『山宮藤吉日記』)

この両派の会合で注目したいのは、愛甲郡側で自由派の橋川文次郎(県議)が「神藤氏退讓不可説」を主張したのに対し、高座北部の自由党がそれに消極的であった点である。それに対して神藤は、既に高座郡南部側から退讓勧告を受けているだけに、同郡北部の支持が少数であると知るや、ついに立候補を辞退せざるを得なくなった。

かくして神奈川第4区は、神藤オ一の辞退により「前代議士」梶野敬三の再選は決定的となった。同じ日におこなわれた候補者選定会のようは、つぎのとおりである。

「神奈川^(マツ)第4区は去る廿八日高座郡海老名村 惣持院に於て高座愛甲津久井三郡の有志有権者相会し、撰定会を開きたるに、神藤オ一氏は自ら候補を辞退し、満場一致を以て梶野前代議士を再撰することに決したりと云ふ。」

(『東京日日新聞』M31.7.31)

(5) 神奈川第5区(中郡・足柄上郡・足柄下郡)

神奈川第5区は、第1回総選挙以来、旧自由党の安定地盤として、自由派の候補者が選出されることはあきらかであった。ただ前回の第5回総選挙では、足柄上郡の安藤亀太郎(元県議)、足柄下郡の長谷川豊吉(元県議)、中郡の森録三郎(元県議)・近藤賤男がそれぞれ立候補した経緯がある(図6を参照)。それだけに、第6回総選挙においても、前回当選の安藤亀太郎に対して誰が立候補するかが注目された。

「第五区の前代議士安藤亀太郎氏に対しては、長谷川豊吉氏再び候補を争はむ決心なるよしにて、目下の情報によれば長谷川氏反て優勢にありと云ふ。」

(『東京日日新聞』M31.7.22)

この記事によると「前代議士」安藤亀太郎に対して長谷川豊吉の名が出たのみである。これを地域別に見ると、足柄上郡の安藤に対して足柄下郡の長谷川が挑む形勢となり、一方の中郡からは立候補なしということになる。したがって安藤と長谷川が競争するとなれば、前回選挙の結果から安藤(767票)が長谷川(491票)に対して優勢と見られがちだが、それでも前回に森録三郎(497票)・近藤賤男(323票)を支持した中郡有権者が長谷川支持にまわれば形勢逆転という事態もじゅうぶんあり得たのである。

しかしながら、前回総選挙(明治31年3月15日実施)につづいて激戦を繰り返すとなれば、各候補者とも運動に多くの資力・労力を費やすことはいうまでもない⁴⁰⁾。また各郡の有志者(有権者)にしても、前回総選挙のような戦いが繰りひろげられるとなると、党派・郷党の統一を欠くばかりか地域間のしこりを生むとして、それに反対せざるを得ない。

7月31日、第5区候補者選定会は「三郡有志会」と銘打って、足柄下郡国府津村(現在の小田原市国府津)で開催され、これには県支部から田野倉仙蔵と事務員大矢正夫が出席した。

(七月)

卅日 横浜に至る。

一金 沓円拾四銭 ○浜迄の車代。

明日の第5区交渉会臨席相談の為メ飯田と津久井やに会す。

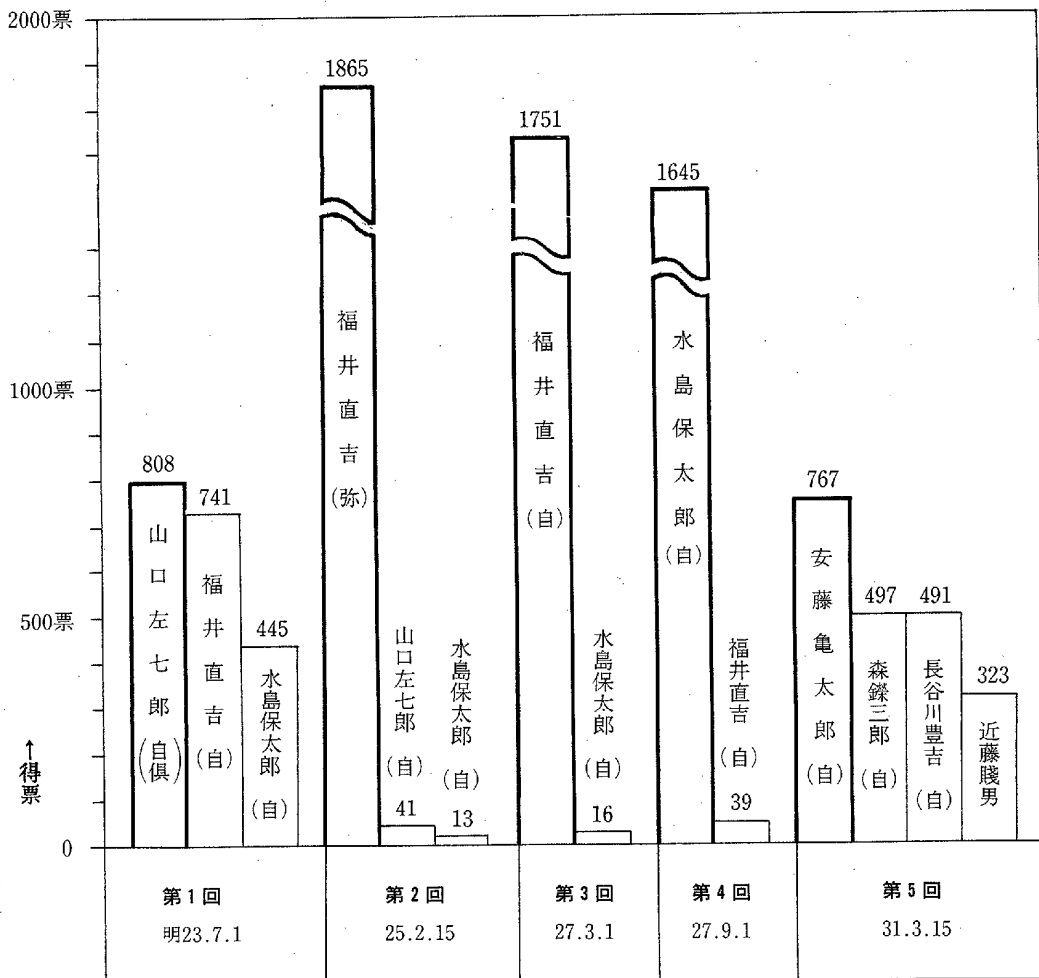
卅一日 大矢、天野^(マツ)正立(但同人ハ大磯^(マツ)5)同道。国府津館に至り、同所昼飯三人分大矢出。茶代金沓円也。

同夜亀井其他同道。藤^(マツ)の沢鈴木や泊り。

(『田野倉日記』)

7月31日の交渉のようは、以上の記事ではあきらかではないが、翌々日の新聞に「神奈川第5区は一昨日三郡有志会に於て前代議士安藤亀太郎氏を再撰することに決定せり」(『東京新聞』M31.8.2)とあることから、おそらく問題という問題もなく「前代議士」安藤亀太郎の再選が決まったものと思われる。

図6. 神奈川県第5区・総選挙の変遷



注. 江川喜太郎『政戦録』(1925)により作成。

かくして神奈川県第5区では「前代議士再選」決定となり、各郡の有志者(有権者)はこれによって政争に巻き込まれることなく生業に勤しむことができた。ここに「前代議士再選」という党の方針を遵守することにより、郡あるいは村の平安状態が維持されるといった、他の選挙区とは異なるケースがあらわれている。

4. 自由・進歩両派の抗争と分裂

憲政党本部は7月末、各選挙区につきのような勧告状を発送した。

「拝啓甚暑の候為国家愈御康豊奉賀候、扱今回の臨時総選挙に付て本部の大方針は既に御通牒致置候通り可成前代議士を挙ぐる筈なれば、此際自然同士相撃同党相争ひ候様の事有之候ては唯だ公党の面目を汚損し地

方の平和を破るのみならず、延ひて又同志者の結合を妨げ我党の発達を害し、洵に憲政の美果を収むるの一大障碍と相成可申候に付、能々御注意一人の私を捨て天下の公に就き譲歩調停内に相争ふの力を以て外に当り、一人にても多くの同志の士を挙ぐる事に御尽力被下度、是れ蓋し貴下等地方有力者諸君の公義責任と被存候、右為念得貴意候^(マア) 勿々頓首⁴¹⁾」

この勧告状が発送された7月末は、神奈川県の場合でもあきらかなように、選挙戦たけなわの時期である。党本部が以上のような勧告を発したのは、全国各地に起こった自由・進歩の抗争を深刻にうけとめ、憲政党の政治基盤に亀裂が生じないように、地方有力者に協力を求めるためであった。

だが、神奈川県下では既に見てきたように、第3区・第4区・第5区で「前代議士再選」が決まったものの、第1区と第2区では自由・進歩両派が対立し、結局、県支部による調停が失敗したことで、候補者が選挙で決着をつけるかたちとなった。

神奈川県における第6回臨時総選挙の得票結

果は、表6に示したように、第3区の徳増源太郎、第4区の梶野敬三、第5区の安藤亀太郎がそれぞれほぼ無競争の状態で当選したのに対して、第1区では島田三郎が鈴木稲之輔を大差で破り、また第2区では大塚成吉が永島亀代司を僅少差で破って当選している。そのうち島田・徳増・梶野・安藤は「前代議士」であるのに対し、大塚は初当選である。

以上の結果を党派別に見ると、進歩派が島田・大塚の2名であるのに対して、自由派は徳増・梶野・安藤の3名となり、自由派が1名ほど上まわる。しかしながら図7に示したように、第5回総選挙までの選挙結果を見ると、各選挙とも旧自由党系4名(または6名)・旧改進黨(進歩)党系1名であったので、第6回総選挙ではむしろ進歩派が1名増の躍進を果たしたことになる。この躍進はいうまでもなく、第2区の大塚が当選したことによるもので、進歩派はこれにより宿願であった郡部進出をも成し遂げたのである⁴²⁾。

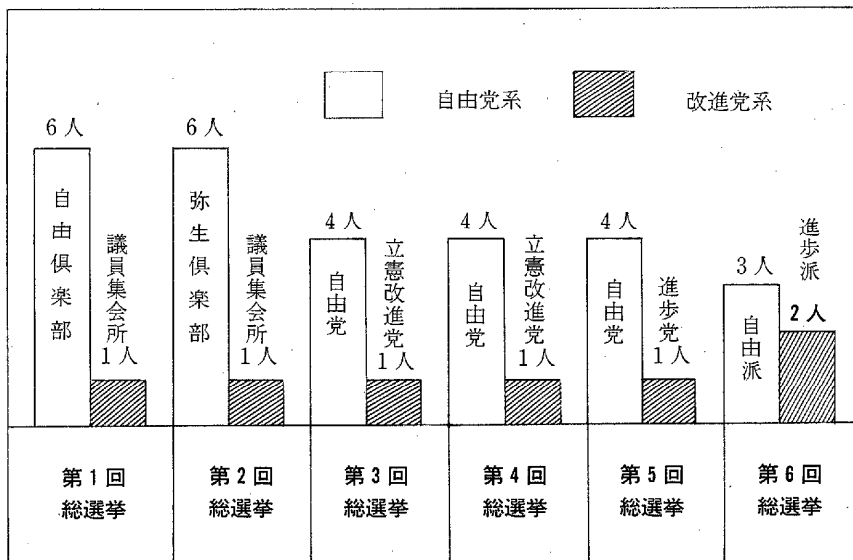
ここに「勝利」を収めた進歩派は、その余勢をかりて自由派鈴木稲之輔の責任追及に乗り出した。これは、選挙時に「前代議士再選」を阻

表6. 第6回臨時総選挙の結果(神奈川県)

選挙区	候補者	得票数
第1区	島田 三郎(進)	当 357
	鈴木稲之輔(自)	186
	その他	1
第2区	大塚 成吉(進)	当 938
	永島亀代司(自)	922
	その他	5
第3区	徳増源太郎(自)	当 741
	その他	6
第4区	梶野 敬三(自)	当 1,202
	その他	14
第5区	安藤亀太郎(自)	当 1,749
	長谷川豊吉(自)	64
	近藤 賤男(自)	9
	森 録三郎(自)他	67

注. 江川喜太郎『政戦録』(1925)により作成。

図7. 党派別にみた神奈川県選出代議士の構成



注. 1) 江川喜太郎『政戦録』(1925)により作成。

2) 第1回・第2回総選挙は三多摩地区(旧第3区)選出の2人(いずれも自由・弥生倶楽部)を含んでいる。

止せんとした鈴木本行の行跡をとらえ、除名処分とする意図からおこなわれたものである。

8月26日に開かれた神奈川県支部の幹事会では、そうした動きをうけて「競争区善後策」と称する議題が取り上げられた。

八月廿六日

各郡市有志者寄附金(七月廿二日決議収入金五百円)割当原案編制の事及競争区善後策の件ニ付、伊藤屋に幹事会を開く(宮田氏病氣欠席)。菊地氏ハ支部に来らる。

(善後策ハ漸く延期の事と決す)

(割当ハ県会議員五分人口五分と略決)(『支部日誌』)

ここで議題として取り上げられた各郡市有志者寄附金の割当については、7月22日の常議員会の決議をうけたもので、支部運営上なるべく早いうちに決定すべき案件であった。それに対して「競争区善後策」の方は、自由・進歩両派

の利害がからんでくる問題であるだけに、簡単な決め方はできなかったはずである。

だが、進歩派有志者はそうした幹事会のやり方に納得せず、9月7日に支部幹事宛の鈴木本稲之輔除名請求書を提出して、断固たる処分をせよと求めた。

請 求 書

一 鈴木本稲之輔氏を除名する事

理 由

本年八月十日衆議院議員総選挙に於ける本県第一区議員候補者は憲政党本部の決議に因るも、前代議士たる島田三郎氏を以て之を充つるは当然の事なるに、不徳義にも鈴木本稲之輔氏は区内実業者の推す所と称し島田氏に対し親から公然候補を争ひたるは、所謂同党相搏ち同志相闘の陋態を演じたるものにして、大政党の一致を欠き其面目毀損したる之より甚しきはなし、故に吾輩は党紀の振肅を重

んずるの主旨より鈴木氏除名の請求難止
所以なり。

右請求候也

明治三十一年九月七日

水越 良介 戸井 嘉策 井上保次郎
市川 守成 高部源兵衛 今井清三郎
川井 考策

神奈川憲政党支部幹事御中⁴³⁾

神奈川支部では、この請求をうけて、9月7日夜に田野倉・飯田両幹事が相談した結果、9月12日に幹事会を開催することを決めた⁴⁴⁾。議題はもちろん、進歩派有志者の請求による鈴木稲之輔除名を承認するかどうかについてである。出席する幹事の構成は自由派3名・進歩派2名(表4参照)で、党派のうえでは自由派の有利が予想できる。

ここで9月12日、そして翌13日におこなわれた幹事会のもようを見てみたい。

全 十二日

幹事会を支部に開く。欠席ナシ。菊地氏^(ママ)ハ請求を容るへからすと主張す。宮田、中村賛成す。

飯田氏ハ曰ク、兎に角常議員会附す方宜シカラント。其他打混シ種々ノ談話ト成リタレ共、帰スル所常議員会ニ附スルヲ得ザルト云ノ意見多数ナル故、余(田野倉一引用者注)ヨリ菊地^(ママ)小兵衛、飯田彰重ノ二氏ヨリ提出者ニ対シ要求撤回ノ交渉アラン事ヲ申出、兩人直チニ諾シ六橋楼ナル要求者方に向フ。宮田、中村、自分、大矢共、伊藤屋に諾否ノ答ヲ持ツ。夜ニ至リ六橋楼ヨリ打合付カザルニ付、明朝迄延期セラレタシ、兩人ヨリ申越ル(中村、宮田、自分、伊藤屋に泊ル)。

全 十三日

菊地、飯田ノ両氏来リ曰ク、要求者ハ到底撤回致シ難キ旨申暮居レリト。依而種々ニ協議スルモ帰着セス、為メニ菊地氏^(ママ)ヨリ田野倉ヲ座長ト而正式ニ幹事会^(ママ)ヲ議ヲ提出シ、直ニ开会シ、菊地氏^(ママ)ヨリ該請求ハ常議員会ニ附スルノ価値ナキ者

ナルニ付却下スベシトノ説ヲ出シ、宮田、中村両氏ノ賛成アリ。飯田氏ノ常議員開
会説出タレ共、結果壱名対三名ノ多数ニ
テ却下ト決ス。

(『支部日誌』)

この2日間にわたる幹事会の中でまず注目すべき点は、進歩派有志者の鈴木除名請求に対して菊池(進歩派)・宮田(自由派)・中村(自由派)の三幹事が反対したことである。ここで自由派の宮田・中村両名が鈴木除名請求に反対したのはもっともであるとしても、進歩派の重鎮たる菊池が自派有志者の請求に反対を唱えたのはどのような事情からなのか。そもそも菊池が支部幹事に就任した事情からいえば、菊池は自由派の指名により、進歩派の推す戸井嘉作(旧進歩党支部幹事)にかわって幹事に就任している。それだけに菊池は、同じ進歩派でも戸井らとは異なる、自由派との協調関係を重視する立場にあったものと考えられる⁴⁵⁾。

これに対して進歩派の飯田は「常議員開会説」を主張したものの、この説は少数意見であったので、幹事会では議決する事前の措置として進歩派有志者の除名請求撤回を求めた。しかし進歩派有志者は、この幹事会の申し入れを断固拒否したため、幹事側はついに幹事会としての決定を下さざるを得ない事態となった。

そこで、幹事会の座長に指名されたのが田野倉仙蔵(自由派)である。田野倉は、この場合、中立の立場に立ったので、除名請求の議決には菊池(進歩派)・宮田(自由派)・中村(自由派)・飯田(進歩派)の4幹事があたった。議決に入ると、菊池がまず発議して「該要求は常議員会ニ附スルノ価値ナキ者ナルニ付却下スベシトノ説」を出し、宮田・中村もこれに賛成したこと、飯田の「常議員開会説」は結局1名対3名で却下される結果となった。

かくして「常議員開会説」はやぶれ、幹事飯田彰重は即日辞表を提出した⁴⁶⁾。また、ここで鈴木除名に失敗した進歩派有志者は、9月14日に戸井嘉作を総代に立て党本部に「憲政黨員鈴木稲之輔党籍除名に関する始末御届書」を提出し

た⁴⁷⁾。この届書の内容は、9月7日の鈴木除名請求書提出から飯田の幹事辞任にいたるまでの顛末を報告し、あわせて支部自由派幹事の数をとのんだやり方(?)を非難するというものであった。つぎに掲げるのは、上記の届書に記された9月13日幹事会のもようである。

「翌十三日再幹事会を開き、飯田彰重より前日に於ける要求者との交渉顛末を報告する処あり、且つ政治上の行動に不徳不正の跡顯然たるに於ては幹事会は徒に多数党員の要求を却下す可きに非らず、矧や常議員会なる機関の存する以上は斯る重大の事件一度は同会の議に附するを以て至当の処措なりと信すと論する処ありしも、自由派の幹事は過去の事実属するといふ茫漠たる理由の下に之れに反対し、遂に多数を待て該要求は之れを却下したり。⁴⁸⁾」

進歩派による「御届書」は、このあと9月16日の『毎日新聞』紙上に「神奈川県支部幹事会の顛末」と題した記事の中で取り上げられ、自由派幹事の「不法抑圧」をひろく訴えるかたちとなった。

自由派幹事の田野倉仙蔵は、これに対して届書の内容には事実の歪曲があるとして『支部日誌』に「幹事会ニハ三名ニ対スル一名ニシテ、座長タル余ノ意見を吐露スルノ要ナク而議シタルヲ、何者ノ虚構?」(9月16日)と記し、さらに自由派も、後日、この届書には虚偽の部分があったとして『毎日新聞』掲載記事の取り消しを求めるところとなる。

いっぽう進歩派は、9月16日には戸井嘉作・飯田彰重・小泉又次郎・海老塚徳三郎・福本清之輔の5名が委員となって党本部に出向き、党総務委員の江原素六・片岡健吉、同幹事の武市彰一・利光鶴松に面会して支部別設の陳情書を提出していた⁴⁹⁾。この陳情書は、「旧自由派の不好意」5項目を挙げ、支部役員人事問題・「前代議士再選」問題・選挙運動等を取り上げて自由派の横暴を暴露し、支部別設の正当性を訴えたものである。ここでつぎに、9月18日発行の『毎日新聞』に掲載された「陳情書」から「旧自由

派の不好意」がどのようなものであったか、要約して述べてみよう。

- ① 自由派は本県第1区で鈴木稲之輔氏を推挙し、前代議士島田三郎氏と角逐せしめた。区内の自由派が実業派の一派と結託してこれを助けたのは、党本部の決議と政界の公德を破るのみならず、他の選挙区で好意的譲歩をした進歩派に対する不好意である。
- ② 本県第2区の候補者選定会で前代議士以外の者を候補者とする決議し、前代議士山田泰造氏も辞退したうへは、進歩派の推す大塚成吉氏が候補者として推挙されて然るべきであったにもかかわらず、自由派は、ことさらに永島亀代司氏を推挙して競争せしめ、第2区を進歩・自由の激戦地たらしめた。
- ③ 自由派は第2区の人勢が大塚氏有利と知るや、陋劣にも大塚派有志者を告訴して数名の有権者を拘束せしめた。そして、開票の結果、大塚氏と永島氏との票差が16票差であったので、こんどは選挙長の不法裁定を名目に当選訴訟を起こした。これは、いたずらに平地に風波を立て、みだりに進歩派に戦いを挑まんとするものである。
- ④ 自由派は、選挙競争中、大塚派有志者を誘い出し、大塚派有権者を買収して大塚派より金をもらったと自首せしめれば、20日以内は自首者は罪なくして、候補者は有罪資格に、投票は無効になる、もしこの策が成功したなら報酬として3,000円を渡すなどともちかけた。これは、われわれ同志の忍ぶべからざることである。
- ⑤ 7月9日の神奈川県支部総会での幹事選出では、すべて会長の指名権にゆだね自由派3名・進歩派2名を選出する手筈であったが、その日は自由派3名・進歩派1名を選び、残る進歩派1名を報告せずに散会した。ついで7月22日の役員補欠選挙では鈴木稲之輔氏が壮士をしたがえて会長の指名権を蹂躪する行動をとった。また、その後の会計監督の選挙では、進歩派2名・自由

派1名を選ぶ約束だったが、自由派はその約束をやぶり自派から2名を選出し、進歩派からは1名だけを選んだ。

この5項目のうち③④の真偽はあきらかではないが、第2区では、県下で最も激しい選挙戦が繰りひろげられただけに、買収行為等が横行したとしても決して不思議ではなかった。いずれにしても、以上の5項目によって、自由・進歩両派の確執が単に鈴本除名問題にとどまらず、他の問題によっても生じていたという事態は認めなければならない。「陳情書」の結論は、つぎのとおりである。

「以上の如き事実なるを以て、吾々は彼等と同一事務所の下に合理的事務を執ること能はず、仍て已むを得ず別に一個の事務所を設置し、自由進歩の区別を問はず公理によりて運動する正義の党員と進退を共にするに決定致候⁵⁰⁾。」

憲政党本部は、かかる陳情書をうけて公正かつ慎重な対応をせまられ、神奈川県自由派からも事情を聴くところとなった。そこで神奈川県支部の自由派役員・有志者も、9月21日と10月1日の両度にわたって党本部に出向いている。

全廿一日 自進両派軋轢の件に付、岡部、石井、中村、亀^(マツ)、佐藤、宮田、自分(田野倉一引用者注)本部に行。楠本、利光、竜野、武市等に面し、進歩派の議論の事実ならざるヲ話し帰浜す。

〔中 略〕

十月一日 自進両派軋轢の件融和する様、田嶋代議に於て為扱る様、去廿一日出部の節本部幹事より聞^(マツ)た取たる后^(マツ) 今何等所分無之為メ、督促の為メ本部臨軒不在。其より梶野氏を訪、同氏同道午后又本部に到り、片岡、江原、竜野、利光等に面談の上来ル五日を期し、本県下五代議を本部に招き調停の相談を開く事を約して帰る。

(『支部日誌』)

憲政党本部では、9月21日に神奈川県自由派が本部に出頭した際には、同県第1区選出島田

三郎代議士に調停させるよう約束し、また10月1日に田野倉仙蔵が党本部を訪い調停を督促した際には、来たる5日に同県選出の代議士5名を本部に呼び調停にあたらせるよう約束した。

だが、これに対して神奈川県選出代議士の対応はルーズか、または消極的であった。かねてより神奈川県支部と選出代議士とのあいだには、代議士1人あたりの支部寄付金(200円)が高額すぎること、各代議士がなかなか募金に応じない事情があり⁵¹⁾、あまりしっくりいってない状態であった。その他に、島田代議士については、上掲の『支部日誌』でうかがえるように、本部の意向をうけて調停にあたるはずであったにもかかわらず、鈴本除名問題の当事者であるので動こうとせず、ついに選出代議士全員がそれにあたるところとなった。

そうした中でおこなわれた10月5日の交渉は、島田・安藤両代議士の欠席により延期となり、その後の見込みが立たなくなったことで、同月7日には自由・進歩両派代表者によって懇談会開催のための折衝がおこなわれた。

五日 中村、亀井、大矢本部行。代議士の内、島田、安藤欠席の為延期。

六日 安藤ハ病気の為、島田ハ高等学会議(高等教育会議一引用者注)の為とて欠席。

七日 飯田彰重氏を津久井屋に招く。亀井、大矢、蜂須賀立会、来ル十一日懇談会の1ニ付相談ス。

(同 上)

この3日間に、自由派は代議士の調停では事態打開が難しいとして、進歩派の飯田彰重と接触し、10月11日に両派懇談会をおこなう合意をとりつけた。ここで進歩派が自由派の申し出に応じたのは、11月1日に開催される憲政党大会に備えて、進歩派としても代議員選出権を獲得しておきたいとの意向があったからであろう。

10月11日、久良岐郡神奈川町(現在の横浜市神奈川区)の名古屋楼で開催された両派懇談会には、自由・進歩の有志者各22名⁵²⁾が出席し交渉にあたったが、席上両派から提示された条件が

折り合わず、双方「融和不成シテ解散ス」(『田野倉日記』明治31.10.11)という結果となった。このとき提示された条件は、つぎのとおりである。

○ 進歩派の条件

- 一 来月一日東京に於て開会する憲政党本部大会に出席すべき本県代議員四名は旧自進両党より二名宛撰出する事。
- 一 従来^(マ)の紛議は大会後に調停する事

○ 自由派の条件

- 一 進歩派の人にして役員の辞任は之れを撤回する事。
- 一 川崎町に別設せし支部は速かに撤去する事。
- 一 去る十六日十八日の毎日新聞に記載せし憲政党神奈川県支部別設の陳情と題する記事取消を為す事⁵³⁾。

ここに見られる主な対立点は、進歩派が代議員選出権を先決問題としたのに対して、自由派が紛議解決を先決問題とすべきであると主張したところにある。進歩派では、既に橋樹郡川崎町に支部(川崎142番地⁵⁴⁾)を別設してただけに、その存立要件ともいえる代議員選出権を得て、ともかく自由派との立場を対等におきたいという意向をもっていた。しかし自由派では、その主張を容れると「進歩派支部」を公認したことになるので、進歩派に対して断固たる態度で役員辞職撤回・別設支部撤去・新聞掲載記事取り消しの3条件を主張した。これによって自由派は、9月14日以前の状態で復帰するよう要求したのである。

自由派は、ここにおいて優位に立った。それは、自由派が拠る神奈川県支部に代議員選出権があったからである。そもそも党本部から各地方支部に代議員選出に関する通牒が出されたのは9月6日で、その通牒には「追て代議員名簿調製の都合も有之候条、来る卅日迄に選挙本部へ御届出有之度候事⁵⁵⁾」とある。したがって神奈川県支部では、大会代議員の姓名を9月30日までに提出できなかったものの、依然として代議員選出権があり、自由派はその権利を行使する

ことができたはずである。また、それだけに進歩派から出た代議員選出権の要求には拒否することもできたのである。

ところで憲政党本部では、10月11日の両派懇談会が決裂したことで、あらためて自由派の代表者をよび、10月22日に両派交渉委員会を党本部でおこなうことを約束している。

(十月)

十九日 梶野、蜂須賀等ト^(マ)本部に出頭
ノ上、来ル廿二日ヲ^(マ)季^(マ)自由^(マ)両派ヨリ
各十名ツ、ノ交渉委員ヲ本部ニ出スヲ
約シ帰派ス。

(中 略)

十月廿二日 交渉委及支部幹事一同本部ニ
出頭。本部幹事片岡、楠本、龍野、武市、
利光着席、交渉委員会ヲ開ク。即決致シ
兼ル起キニテ、追テ裁決^(マ)ト決ス。

但シ自派提出ノ三条件、毎日新聞九月
十六日十八日ノ記事取消及ヒ進歩派ガ
設立シタル支部撤去、同派役員総辞職
ノ三件共略通過ノ見込。

(『支部日誌』)

10月22日の交渉委員会は、ここに見るかぎりでは自由派の優位で進行したようである。また、この委員会では提示した三条件がほぼ通過の見込みとなったのは、おそらく進歩派の方にもそれ相応に譲歩せざるを得ない状況があったからであろう。

かくして自由・進歩両派の抗争は党本部の斡旋で収束する見込みとなったが、それに対して10月11日両派懇談会で進歩派から出された支部代議員選出の件についてはまだ結論が得られない状態であった。ちなみに、党本部から10月8日付で各地方支部に宛てられた憲政党大会開催通知書によると、支部代議員は「大会前種々協議申上度件有之候間、本月廿八日迄に御着京直ニ本部へ届出⁵⁶⁾」云々とあるだけに、大会(11月1日開催)4日前の10月28日までにはそれを決定していなければならなかった。また、そのためには遅くとも10月27日には支部臨時大会を挙行して代議員を選出しておく必要があった。

(十月)

廿四日 代議員ノ件ニ付、斎藤秘書官邸ニ行。川崎及田島ヲ運動シテ帰浜ス。

廿五日 支部臨時大会ニ付〔以下、記述なし〕

(同 上)

10月24日、田野倉仙蔵は「自由派支部」を代表して内務大臣秘書官斎藤珪次(自由派)の官邸を訪問し、代議員選出についての指示を受けたものと思われる。本来、党本部で処理されるはずの用件が党自由派幹部の官邸でおこなわれたことは、既に「憲政党本部ハ空家モ同様ナリ⁵⁷⁾」というありさまであったことを物語っている。

党本部幹事利光鶴松(自由派)の手記によれば「藩閥ニ対スル反動的人氣ハ多年犬猿ノ如クナリシ自由党ト改進黨(進歩党一引用者注)トヲ合同セシメタレドモ、合同後ノ総選挙ニ於テ各地支部ニ軋轢ヲ生ジ、又、獺官運動ノ絶望者ハ内閣ヲ破壊シ党ヲ破壊シ、以テ新天地ヲ開カント希望スルニ至リ、両党ノ幹部モ永続セザルヲ悟リ、各自派ノ為メ後図ヲ為サント考フル事トナリ⁵⁸⁾」とあり、この頃には党幹部にも党および内閣を破壊する計画がすすんでいたとしている。

またいっぽう、関東自由派の拠点「関東倶楽部」では、神奈川県自由派から梶野敬三(代議士)・鈴木稲之輔(県会議長)の両名が調査委員となり⁵⁹⁾、当時、閣内・党内外で問題となっていた尾崎文相共和演説事件⁶⁰⁾と横田検事総長懲罰事件⁶¹⁾について調査していた。これにより同倶楽部は10月21日の会議において、尾崎文相共和演説事件について「右は文部大臣としては失体の演説なり、決して不問に付すべきに非ず」とし、さらに横田検事総長懲罰事件に対しては「大東法相が官職を賭して横田の懲戒を閣議に提出せしに、法相の要求は遂に成立せず、附帯の事実即ち賤劣なるの文字の為に懲戒せられたるものなれば、法相たるもの速に処決する所なかるべからず」とする決議を満場一致で可決していた⁶²⁾。ここにおいて関東自由派は、大隈首相以下進歩派閣僚の政治責任を追及する姿勢をあきらかにしていたのである(この後、文相尾崎行雄

は10月24日付で辞職し、同月27日には犬養毅が後任として文相を拝命する)。

このように事態が緊迫する中で、神奈川県自由派では10月25・26日に、臨時大会開催のための役員遊説を展開、蜂須賀又次郎(常議員)を高座郡方面へ、中村得治を橘樹郡方面へ、田野倉仙蔵を三浦郡方面へ、それぞれ派遣した⁶³⁾。明けて10月27日、「自由派支部」は戸塚町の鎌倉倶楽部で臨時大会を挙行して代議員2名(姓名不詳)を選出し、翌28日には支部幹事3名・代議員2名と県議石田松之助(中郡選出)を加えた6名が上京して⁶⁴⁾、党大会の開催を待った。

ちょうどその頃、憲政党本部では総務委員会が開かれ、その席上で自由派委員がまず10月29日に憲政党大会協議会を開催することを提議したのに対して、進歩派は大会協議会の延期を主張し、そのまま双方とも譲らず、ついに議論の一致を見ず終会となった⁶⁵⁾。しかし、その間、自由派委員は代議士・代議員宛の案内状をひそかに発送して、大会協議会の29日開催を強行できるよう手筈をととのえていた⁶⁶⁾。この強行策は、党幹事利光鶴松の立案になるもので、その案はあらかじめ星亨・松田正久・林有造・片岡健吉等の自由派幹部にも提示し、それぞれの賛成を得ていた。利光の案とは、以下のとおりである。

「予ノ案ハ其日ノ内ニ案内状ヲ発シテ、憲政党ノ臨時大会ヲ開キ、其大会ニ於テ憲政党解散ノ決議ヲナシ、之レヲ警察署ニ届ケテ解散手續ヲ完了シ、尚同時ニ新ニ憲政党創立ノ決議ヲナシ、従前ノ憲政党员ニシテ特ニ脱党ノ意思ヲ表示セザル者ハ其儘新ナル憲政党ノ党员ト見做シ、別ニ入党届ヲ要セズトノ追加決議ヲナシ、創立ノ決議ハ解散ノ決議ト同時ニ警察ニ出ヅルト云フニアリ⁶⁷⁾」

かくして10月29日、憲政党自由派は、神田青年会館に自派代議士・代議員200余名を召集して「憲政党大会協議会」を開催、そこでさらに協議会を党大会に切り替え、憲政党の解党を決議するとともに、新党「憲政党」結党を決議した⁶⁸⁾。これにより「憲政党」大会となり、新党組織に

関する協議に移り、党総務委員に星亨・片岡健吉・江原素六の3名を、党幹事には利光鶴松・龍野周一郎の両名を選出した後、党綱領・党則は旧憲政党のものを踏襲すると決定した⁶⁹⁾。

自由・進歩両派の抗争は、ついに憲政党の分裂となった。その衝撃は、ただちに地方支部にもおよんだ。党自由派では、10月29日付で地方

支部につぎの通告書を発し、解党の事実をあきらかにした。

「曩に自進両党を解き憲政党を樹立せし爾来、両派の感情を一洗する能はず、往々にして其抵触を免れざるものあり。本党の洵に遺憾とする処なりしか、今日に至り衝突の度は益々激甚を加へ調和の望遂に絶へた

表7. 神奈川県支部の収入分（明治31年10月末まで）

月 日	金 額	入 金 者	備 考
7 / 7	70円00銭	蜂須賀 又次郎	支部発会式費
"	50. 00	永 島 亀代司	" (11月9日に返金)
"	40. 00	矢 野 祐 義	"
9	88. 80		発会式の会費集金分
11	35. 00	矢 野 祐 義	進歩派より発会式費の内へ寄付受取
18	50. 00	永 島 亀代司	地方運動費 (11月9日に返金)
9 / 5	10. 00	石 井 鎌之助	鈴木安造の青年会負担分
11	60. 00	蜂須賀 又次郎	旧金貨にて (9月29日に返金)
14	50. 00	梶 野 敬 三	代議士支部負担金 (200円の内)
22	10. 00	石 井 鎌之助	常置委員負担金預かり
29	100. 00	金 子 縫 蔵	10月15日払いの約 (10月24日に返金)
10 / 17	50. 00	長谷川 豊 吉	運動費
24	300. 00	柳下 八郎兵衛	11月10日払いの約 (11月9日に返金)
計	913. 80	注、『支部日誌』『田野倉日記』により作成。	

表8. 神奈川県支部の収支関係（明治31年10月末まで）

◇ 収 入	913円80銭
◇ 支 出	617円30銭8厘
《内 訳》	
支部支出 (田野倉支払い)	177円24銭
支部経常費 (大矢支払い)	135円
青年会支出 (田野倉払い)	44円62銭
諸費 (車代・飲食費など)	17円13銭
借入金・団体宛支払い	217円33銭3厘
私費 (田野倉支払い)	25円98銭5厘
◇ 残 額	296円49銭2厘

注、『支部日誌』『田野倉日記』により作成。

るを以て茲に本日党大会の協議会に於て直に性質を変じて大会を開き、断然解党を決議したる事は即時電報を以て報じたるが如し、仍て更に又状を具して、右解党の儀致御通告候也⁷⁰⁾」

ここに、それまで事実上分裂状態の憲政党神奈川県支部は解体し、「自由派支部」はあらたに「憲政党」神奈川県支部として発足するところとなった。これによって同支部は、進歩派との紛議に忙殺されなくなったとはいえ、それまでの懸案であった支部寄付金問題には取り組まなければならなかった。

ちなみに表7は、『支部日誌』『田野倉日記』の出納記録によって憲政党支部発会式から明治31年10月末までの支部収入をまとめたものである。これによると、支部収入のうちで支部寄付金（発会式費を除く）に該当するのは代議士梶野敬三の50円のみで、他のほとんどが支部役員・有志者からの借入金であったことがあきらかになる。当時の借金財政ぶりは、また10月末までの支部収支関係をまとめた表8を対照してみると明白で、たとえば10月24日に柳下八郎兵衛からの借入金が300円があるが、それに対して10月末日の残額が296円49銭2厘であることから、もし柳下からの借入金がなかったと仮定すれば、「自由派支部」の財源は10月下旬で完全に底を突く状態にあったことがわかる。

このように借金財政が常態化すると、支部としてはその借入金に対して他からの借入金をあてて返済しなければならなくなる。それは「憲政党」支部となっても同様であって、同支部は、それまでの借入金（柳下八郎兵衛からの300円、永島亀代司からの100円など）を返済するために、11月8日に平塚の江陽銀行（資本金20万円・頭取杉山泰助）から1,000円を借り受けている⁷¹⁾。その借用証書（控）は、つぎのとおりである。

借 用 金 証 二百五十六円四十七銭
但シ利子年式割

一金壹千円也

右金額之義ハ拙者共入用ニ差問ヘ候ニ付借

用正ニ請取候処確實也、且返済ハ来ル明治三十二年三月廿日限り、前記之利子元金ニ相添無相違元利共、連借一同ニテ吃度返済可仕候、為后日之連借用金証如件。

明治卅一年十一月

岡部芳太郎	中村 得治	牧野 随吉
梶野 敬三	鈴木 安造	安藤亀太郎
永島亀代司	長谷川彦八	小島 貞雄
内田重太郎	山田 嘉毅	鈴木宗之助
大貫 弥七	福井 直吉	森 録三郎
石井虎之助	宮田 寅治	長谷川豊吉 ^(ママ)
柳下八郎兵衛	石井鎌之助	田野倉

江陽銀行頭取

杉 山 泰 助⁷²⁾

この借入金は、岡部芳太郎（県議）が中心となって準備した743円53銭を同銀行に預けたうえで借りたもので⁷³⁾、その証書には上記21名が連署している。これらの連署者は、表9に示すように郡部自由派の有力メンバー、あるいは旧自由党武相支部・憲政党神奈川県支部の役員経験者であった。

ここで「憲政党」神奈川県支部は、ひとまず財政上の危機を脱し、それと同時に、旧「武相支部」体制を踏襲しつつ、郡部自由派のあらたな拠点としての意味をもつようになったのである。

5. まとめ

これまで憲政党神奈川県支部の成立から分裂までの問題について私見を述べてきたが、ここで本稿のまとめとしていくつかの点をあげておきたい。

まず第一に、あげておきたいのは支部役員人事問題についてであるが、この問題はそもそも憲政党神奈川県支部が旧自由1,292名、旧進歩432名という勢力関係のうえに成り立っていたことをぬきにしては考えられない。その点からいえば、自由派が優勢であるにちががなく、進歩派は劣勢であることを免れ得なかった。それだけに、支部役員選挙となると、進歩派としては

表 9. 江陽銀行借入金の連借者 (郡部自由派)

憲政党 支部役職	氏 名	出身地	地 位	「武相支部」での主な役職
常議員	永島 亀代司	久良岐郡	前県議	幹事〔明27-28〕
常議員	柳下 八郎兵衛	橘樹郡	県 議	
	小島 貞雄	都筑郡	前県議	
常議員	内田 重太郎	〃	県 議	
常議員	鈴木 宗之助	〃	県 議	
	鈴木 安造	三浦郡	県 議	
	石井 鎌之助	鎌倉郡	県 議	
	牧野 随吉	高座郡	県 議	
	長谷川 彦八	〃	元県議	
	山田 嘉穀	〃	元代議士	
幹 事	中村 得治	愛甲郡	前県議	幹事〔明26〕代議員〔明27-31〕 代議員〔明27〕
	大貫 弥七	中 郡	県 議	
	福井 直吉	〃	元代議士	幹事〔明27〕代議員〔明30〕
	森 録三郎	〃	県 議	
	石井 虎之助	〃	元県議	代議員〔明27〕
常議員	岡部 芳太郎	津久井郡	県 議	
	梶野 敬三	〃	代議士	
幹 事	田野倉 仙蔵	〃	前県議	
	安藤 亀太郎	足柄上郡	代議士	
	長谷川 豊吉	足柄下郡	元県議	

注. 田野倉仙蔵「借入金証」控(杉山泰助宛、明治31.11)、『自由新聞』M26.9.5、『新潮』第4号、同第6号、同第18号、『自由党党報』等125号、同第129号、同第147号、同第1156号、森久保平三郎編『神奈川県名誉職員録』、『神奈川県史』別編1〔人物〕等により作成。

多数決の選出方法より、自由派との内約によって旧進歩党県支部幹事の戸井嘉作等を役員に就任させるほうが上策と見たのだろう。しかし、自由派は2度の支部役員選挙において進歩派との内約を破り、戸井嘉作を排除しただけでなく、多数の力を背景に自派優位の支部組織をつくり上げた。ここに神奈川県支部は発足当時から、両派融和の足がかりを欠くかたちとなり、自由・進歩両派の確執という厄介な問題をかかえまねばならなかったのである。

ところで、以上のような関係を一層悪化させたのが第6回臨時総選挙である。これにより県下の自由・進歩両派は、党の選挙方針による「前代議士再選」問題というもう一つの問題に対処

しなければならなかった。そこでまず着目したのが選挙区での候補者選出のもようであるが、本稿で見てきたように、各選挙区では「前代議士再選」の方針に拘束されことなく他の候補者を推す強い動きがあった。それに対して神奈川県支部の幹事は、「前代議士再選」を推進する地位にあったにもかかわらず、実際には両派間の調整にあたる程度にすぎなかった。このように見てくると、当時の憲政党神奈川県支部という組織がいかに脆弱なものであったか、それに加えて地方黨員においては従来の党派感情にとられ、自派の地盤をいかに頑強に守らんとしていたかがあきらかとなる。

そして総選挙後には、鈴木除名問題から起こ

った神奈川県支部の紛争は、その上部機関である憲政党本部においても解決すべき課題となった。しかし、これは進歩派の支部別設陳情書（9月16日に党本部に提出）でもあきらかなように、支部創立以来両派間に生じた問題のすべてを露呈したものを見てよく、それだけに県下選出代議士は問題解決に消極的となり、またその種の問題を多く抱え込んだ党本部としても対策に苦慮せざるを得なかった。そうした中で、神奈川県支部の紛争は憲政党本部での難問題の一つとなり、他の地方支部での紛争とも絡みあって党首脳の葛藤を生じ、党指導部の両派對立を激化させる誘因ともなった。

「中央ニ居ルモノハ大局ヲ達観シ合同シタレドモ、地方ニテハ各地方方々ノ事情アリテ、支部ノ設立、役員ノ選定、代議士候補ノ決定等仲々円満ニ行ハレズ、種々ノ紛争ヲ惹起シテ、双方ヨリ本部ニ持込ミ来リ、之ニ対スル本部ノ処理少シニテモ手落ちアルトキハ大騒動ヲ生ズルト云フ実況ニシテ、当時本部ノ苦勞ハ一方ナラズ、又本部ノ総務委員タル楠本、犬養、片岡、江原ノ四氏ハ何レモ大局ニ通ズル名士タルニハ相違ナキモ、多年党ヲ異ニシテモ争ヒ来レル間柄ナレバ、各支部ノ訴訟ヲ裁断スルニ当リテ、無意ノ間ニ歴史ト部下ニ偏スルハ人間トシテ免レ難キ弱点ナリ、初メハ無意ノ間ニ意見ノ相違ヲ生ゼシモ、同様ノ問題ヲ度々繰リ返シテ争フ間ニハ感情ノ衝突トナリ、遂ニハ互ヒニ、我々ハ常ニ大局ヲ觀テ公平ニ事ヲ処断スル考ヘナレドモ、先方ハ大局ヲ忘レテ旧党派ノ為メニ計リ勝手ノ説ノミヲ主張スルガ故ニ、我々モ大ニ覚悟スル所ナカル可ラズ、然ラザレバ後悔スルモ及バザル可シト云フ様ニナリ、無意ニアラズシテ有心故造ノ意見衝突トナルニ至リ、公平ニ原被ノ訴訟ヲ裁断ス可キ裁判所ガ何時ノ間ニカ両造トグルニナリテ、益々争論ヲ拡大スルニ至レリ」

（『利光鶴松翁手記』p. 342-343）

ここに、それまで神奈川県支部等の紛争を扱

ってきた党首脳も「合同ノ永続セザルヲ悟リ、各自派ノ為メ後図ヲ為サント考フル事トナリ」、また党自由派としても、尾崎文相共和演説事件・横田検事総長懲罰事件の政治的敗北を機として憲政党破壊計画を実行に移すところとなり、ついに10月29日に党大会を強行して憲政党を解党、ただちに新党「憲政党」を結成した。

新党結成後の神奈川県「自由派支部」は、旧「武相支部」体制を踏襲したものとなった。そのことは、新党支部運営のための資金借入に際して郡部自由派の有力者21名が関与したことからもうかがえるのである。そもそも憲政党神奈川県支部の財政は、7月22日の常議員会や8月26日の幹事会において寄付金に関する決定があったにもかかわらず、ほとんど一部有志者（自由派）からの借入金でまかなわれ、そうした状態は憲政党解党の10月29日にまでおよんだ。これにより憲政党神奈川県支部という組織自体が、地方黨員からの支持をもたない、いかに浮き上がったものであったかがあきらかとなる。それに対して新党結成後の「自由派支部」についてはどうかというと、依然として借金財政という同質の問題を抱えつつも、従来の「武相支部」体制に立ち帰ることによって、地域社会との結びつきをふまえた、郡部実力者による新たな政治拠点としての意味を持つようになったと考えられる。

注記

- 1) 自由・進歩両党合同の動きは、明治31(1898)年6月3日、山下倶楽部の平岡浩太郎の仲介により、自由党から杉田定一・西山志澄・栗原亮一、進歩党の河野広中・竹内正志等が平岡邸で会談したことにはじまる。そして議会停会当日の6月7日には、両党名士数名が平岡邸に会合、ついで10日、議会解散後に催された「前代議士会」では両党いずれも合同に関する交渉経過を報告、翌11日の青票懇親会(地租増徴案反対の前代議士が出席)では片岡健吉(自由党)が両党合同の条件を公表し、これにより宣言・綱領起草委員として栗原亮一(自由党)・竹内正志(進歩党)の各1名が選ばれた。以上、林田亀太郎:日本政党史、上巻、大日本雄弁会(1927) p. 475、伊藤勲:明治政党史の研究、有斐閣(1983) pp. 35-39による。この一連の動きの中で、両党が重視したのは「選挙区に対しては前代議士を再選せしむるの条件として堅く相侵犯せざる事」および「増税問題を以て合同の条件とせざる事」の2点であった(国民新聞、M31.6.14)。既に自由・進歩両党では、伊藤内閣提出の地租増徴案を両党提携して否決した場合には議会解散は必至と見て、以上の2点を合同の条件とし、またそれを地租修正派をも含めた両党代議士に提示することで、新党結成への期待感を呼び起こそうとしたのである。やがて議会解散後に合同の条件が「前代議士」に承認されると、こんどはその条件を新党構想の中でどう位置づけ明文化するかが焦点となった。その点については、6月16日に発表された憲政党宣言・綱領(いずれも草案)の後端に「申合」として「臨時総選挙には前代議士を候補者に推選する事」(毎日新聞、M31.6.16)と明記され、新党では来たるべき総選挙には、その備えがあることを示したのである。
- 2) 憲政党支部の発会式挙行件数を月別に見ると、6月2件、7月42件(上旬10件・中旬19件・下旬12件・挙行日不明1件)、8月2件、9月1件となり、7月の支部設置が圧倒的に多いことがわかる。以上、憲政党党報、第2-6号(1898、8、20-10、20)等により算出。
- 3) 憲政党党報、第1号(1898、8、5) p. 43
- 4) 「前代議士」に関する規定として、憲政党党則第8条に「大会ハ本党代議士及前代議士并ニ各府県選出ノ代議員ヲ以テ組織ス」(憲政党党報、第1号[1898、8、5] p. 38、傍点は引用者)とあり、また9月6日付の党本部通牒(各支部宛)には「党則第八条に在る前代議士とは最近の前代議士(第十二議会に列したる衆議院議員を云ふ)に限る事」(憲政党党報、第4号[1898、9、20] p. 30、傍点同前)とある。本稿で用いる「前代議士」の語も、この党本部通牒の定義にしたがった。
- 5) 第6回総選挙の結果を見ると全国257選挙区にあって、憲政党の同士打ちとなったいわゆる「競争区」は、次点者(憲政党)得票数100票以上の事例にかぎっても86選挙区に達する。これだけでも全選挙区の約3分の1以上が「競争区」であったことになる。以上、憲政党党報、第2号(1898、8、20) pp. 23-39により算出。
- 6) 本稿で扱う田野倉仙蔵の日記資料(明治31年)は2種類である。そのうちの1つは市販のノート(たて205mm、よこ130mm)に支部運営に関する記事をしるし、それに支部の出納を記録したもの、もう1つは市販の懐中手帳(たて105mm、よこ70mm)に田野倉自身の活動と金銭の出入りを書き留めたものである(神奈川県城山町在住、馬場厚氏所蔵)。これらの日記資料は標題がないので、本稿では便宜上、前者を『憲政党神奈川県支部日誌』(略して『支部日誌』)、後者を『田野倉仙蔵日記』(略して『田野倉日記』)と表記する。
- 7) 田野倉仙蔵の出自・経歴はつぎのとおりである。安政元(1854)年11月14日、相模国津久井郡小倉村(現・城山町)の中堅農家に生まれる。若年より小倉村の村治に携わり、明治25(1892)年に小倉村長、明治26(1893)年には三多摩郡東京府移管に反対の立場で活躍、明治27(1894)年に県会議員に当選、明治28(1895)年には県会常置委員に選ばれ、明治30(1897)年に県会議員を辞す。大正6(1917)年5月1日、64歳にて没す。以上、神奈川県史、別編1〔人物〕、神奈川県(1983) p. 480-481による。
- 8) 伊藤勲:明治政党史の研究、有斐閣(1983) pp. 35-44
- 9) 東京新聞、M31.6.21-22
- 10) 東京新聞、M31.6.18
- 11) 12) 17) 憲政党党報、第3号(1898、9、5) p. 37
- 13) 15) 16) 毎日新聞、M31.9.18
- 14) 横浜貿易新聞、M31.7.13
- 18) 19) 憲政党党報、第1号(1898、8、5) p. 43-44
- 20) 「前代議士」利光鶴松は、両党合同によって生ずる事態をつぎのように述べている。「両党ノ士ト雖モ、合同ノ勢力ヲ以テ藩閥ヲ倒ストロニハ云ヘドモ一定ノ成算ヲ有セシニハアラズ。(中略)唯、両党合同スレバ選挙ハ或ル例外ヲ除クノ外、全国無競争トナルヲ以テ、代議士ハ後顧ノ憂ナキニ至リ、政党ハ全カヲ挙ゲテ藩閥ト戦ヒ得ルノ余力ヲ生ズルノ点ハ、合同ニ依テ両党ガ直チニ享受スルノ利益トセラレタリ、其外ノ利益ハ曾テ予想セザル所ナリ」(利光鶴松翁手記、小田急電鉄[1968] p. 326-327)。
- 21) 当時、神奈川第1区に反島田派勢力の動きがあったことは、つぎの新聞記事からもうかがわれる。「第一区は相変らず島田三郎氏独占の地にて、他に候補者らしきものあらざれど、実業家中より大々的奮発にて打て出むと力味居るもの之なきに非らずと云へば、氏も亦油断ならずと云ふ」(東京日日新聞、M31.7.22)。
- 22) 23) 24) 横浜市会事務局:横浜市会史、第1巻〈官地正人執筆〉、横浜市(1983) pp. 220-222
- 25) 地主派とは、明治22(1889)年横浜の市制施行されるに先立ち、貿易商人が共有物を独占することに反対し、富豪の専断に対する市民の反感を利用して結成された勢力で、貿易商以外の地主層が中心となった。その主唱者は伏島近蔵で、既に明治20(1887)年5月に吉田健三・海老塚五郎兵衛等と公道倶楽部を組織していたが、翌年4月には共有物事件で商人派に反対する岡沢甚兵衛・宮尾靈賢・増田勤七等も加わり、地主派

- と呼ばれた。その後、鈴木稲之輔・黒部与八等を指導者とする住民苦楽府の壮士たちも加わり、また明治23(1890)年には商人派が分裂して木村利右衛門・平沼専蔵・渡辺福三郎・若尾幾造等が地主派に投じて、地主派の勢力は全市を押し、市会を左右した。以上、横浜市立大学経済研究所編：横浜経済・文化事典、同研究所(1958)p.22による。
- 26) 商人派は、明治22(1889)年、横浜に市制が施行されるに先立ち、地主派に対立して結成された勢力で、本町外13ヶ町の貿易商人をその中堅とし、これに同調するものも加わった。地主派との対立の発端となったのは共有物事件で、地主派が貿易商人の共有物独占を攻撃したのに対して、原善三郎・小野光景・茂木惣兵衛・平沼専蔵・渡辺福三郎・木村利三郎・若尾幾造等の元老が総出で、同好会を組織して対抗した。明治22(1889)年の市会選挙では勝利を取めたが、翌23(1890)年には小野派・木村派とが対立、木村・渡辺・若尾等が改革派と称して、地主派に走った。これにより地主派は市会を押ししたが、衆議院議員選挙では商人派の推す島田三郎が当選しつづけた。以上、横浜市立大学経済研究所編：横浜経済・文化事典、同研究所(1958)p.19-20による。
- 27) 引用記事に見られる「実業家」の明治30年度における所得税(以下○印)と営業税(以下□印)は、原善三郎(蚕糸仲買商)○2,626円14銭□1,212円9銭4厘、若尾幾造(蚕糸仲買商)○1,111円86銭□334円、木村利右衛門(蚕糸仲買商)○1,077円42銭□341円、渡辺福三郎(海産物商)○2,136円42銭□55円、平沼専蔵(洋糸織物仲買商)○2,024円13銭□19円となる。これに対して鈴木稲之輔(煙草商)は○35円76銭□70円31銭(本店・支店合計額)となり、上掲の「実業家」より下まわっている。以上、日本全国商工人名録発行所：日本全国商工人名録、第2版、同発行所(1898)による。
- 28) 29) 30) 31) 毎日新聞、M31.7.27
- 32) 毎日新聞、M31.7.31
- 33) 『支部日誌』支部出納記録の7月18日の項から4日間にはわたり「三浦郡南北葛藤事件調停」との横書きがある。その他にも9月23日の項から3日間にわたり「三浦南北調和の為旅行」とある。これによって総選挙以後も「南北葛藤事件」は支部自由派の課題であったことがわかる。
- 34) 東京日日新聞、M31.7.30
- 35) 神藤才一の略歴は、つぎのとおり。万延元(1860)年、高座郡相原村の富農神藤利和の3男として出生。明治10(1877)年に陸軍士官学校にすすみ、卒業後は陸軍少尉に任官。以後、累進して中隊長にいたる。明治18(1885)年、現職を辞し、フランスに自費留学、パリの法律大学院および政治大学で外交と政治学を学び、法律博士の称号を取得した。明治28(1895)年に帰朝し、慶応義塾等で教鞭を執るかたわら、政治活動に従事、明治31(1898)年3月には自由党に入党している。以上、山崎謙編：衆議院議員列伝、同伝発行所(1901)pp.補13-15による。
- 36) 37) 38) 39) 上山和雄：陣笠代議士の研究、日本経済評論社(1989)pp.29-32
- 40) 第5区に競争を厭う空気があったことは、「第五区は前回の総選挙に於て非常の激争ありたる土地とて、安藤長谷川両氏とも戦争に疲れ果てたる場合なれば、今回は勇気なからむが多分交渉の上、長谷川前代議士を推選することとなるべし」(東京日日新聞、M31.7.30)という記事からもうかがえる。
- 41) 憲政党党報、第2号(1898.8.20)p.35
- 42) 瀬尾芳夫：戸井嘉作伝、同書刊行会(1938)p.41
- 43) 毎日新聞、M31.9.10
- 44) 『田野倉日記』に「夜飯田章彰ヲ津久井やに喚、競争善後策ヲ相談す(来ル十二日幹事会を開く事とす)(9月10日)とある。
- 45) 『田野倉日記』に「鶴嶺村 菊 小兵衛氏ヲ訪じ、来ル十二日幹事会の件ニ付相談ス、同氏反意也」(9月9日)とあり、また『支部日誌』にも「稲本除名の件ニ付、菊地氏を自宅に訪問す。同氏ハ其請求に大反対なる意見を吐露セラル」(9月9日)とある。これにより菊池小兵衛が、自由派との協調関係を重視して進歩派有志者の鈴木除名請求には反対の立場をとっていたことがわかる。
- 46) 47) 48) 毎日新聞、M31.9.16
- 49) 50) 毎日新聞、M31.9.18
- 51) 『支部日誌』に「徳増代議士ヨリ当支部に係ル寄附金ノ件ニ付、戸塚村。齊藤万蔵露木要之助両氏に託シ、伊勢屋にて徳増に談判セシム。徳増曰ク(他兩名と堅く約定シル事故、御求メに應シ難シト、然は他兩人の出金セル額丈ハ出金スベシト)齊藤老人より聞」(9月1日)とあり、また「代議士寄附金の事に付、蜂須賀同道。上郡安藤龜太郎ヲ自宅に訪問。同氏病気の由にて面会せず、云置て小田原に赴く」(9月27日)とある。
- 52) 東京新聞、M31.10.14には「神奈川県に於ける徳増、梶野氏の一派と大塚氏の一派重立ちたる者二十名」となっているが、ここでは『田野倉日記』にある「自進各廿二名ヅ、出席」(10月11日)の方が妥当と見られる。
- 53) 東京新聞、M31.10.14
- 54) 『田野倉日記』の最終頁に「川崎百四十二番地、進歩党」とメモ書きがある。
- 55) 憲政党党報、第4号(1898.9.20)p.30
- 56) 憲政党党報、第6号(1898.10.20)p.44
- 57) 利光鶴松翁手記、小田急電鉄(1968)p.370
- 58) 利光鶴松翁手記、小田急電鉄(1968)p.359
- 59) 憲政党党報、第6号(1898.10.20)p.49
- 60) 明治31(1898)年8月22日、尾崎文相(進歩派)が帝国教育会主催の講習会で「日本に仮に共和政治ありと云ふ夢を見たと仮定せられよ」云々と演説したことから、『東京日日新聞』がこの文相の演説を「不詳不敏の甚きもの」と攻撃し、自由派もこれにより尾崎の罷免を求めて猛烈に批判を展開した。以上、伊藤勲：明治政党史の研究、有斐閣(1983)pp.83-86による。
- 61) 明治31(1898)年10月、大東法相(進歩派)が大審院検事総長横田国臣の懲戒案を閣議に提出した際に、

西郷海相・桂陸相と結んだ板垣内相（自由派）の反対論が有利となったが、勢いに乗じて横田検事総長が大東法相を批判した弁駁書を各大臣に配付したために、横田は上官侮辱に問われ同月15日付で懲戒免職処分となった。これにより自由派各大臣は一転して不利となった。以上、中山泰昌編:新聞集成明治編年史、第10巻、同書編纂会（1938）p. 281, p.290, p.293、利光鶴松翁手記、小田急電鉄（1968）pp. 361-364による。

62) 人民（東京新聞を改題）、M31.10.22

63) 『支部日誌』支部出納記録の10月25日の項に、蜂須賀又次郎に「大会出席遊説の為、蜂須賀高座廻り旅費」、中村得治に「橘樹廻り右同断」として旅費が支給されている。田野倉自身も10月25・26日に「金沢迄人車代」「鎌倉迄人車代（二人挽）」「横浜迄汽車代」等を支出している。

64) 『支部日誌』支部出納記録の10月28日の項に、「幹事代議員及石松（石田松之助—引用者注）本部行汽車代」として旅費2円40銭が支払われている。これは、6人分の汽車賃に相当する。

65) 66) 67) 利光鶴松翁手記、小田急電鉄（1968）p. 373-374

68) 69) 憲政党党報、第1巻第3号、（1899. 1. 1）p. 171-172

70) 憲政党党報、第1巻第1号、（1898. 12. 5）p. 43

71) 『支部日誌』支部出納記録の11月8日の項に、江陽銀行から「支部費用の為メ借入」として1,000円を借り受けている。

72) 馬場厚氏所蔵。

73) 『支部日誌』支部出納記録の11月7日の項に「岡部ヨリ預り」として743円が支部に預けられ、さらに翌8日の項には「江陽銀行へ渡ス」として岡部の手から743円53銭が同銀行に渡っている。それと同時に、同銀行より「支部費用の為メ」の資金として1,000円を借り受けている（注71と重複）。

《付記》

本稿をまとめるにあたり、馬場厚氏（城山町史編纂委員）には、田野倉仙蔵日記資料の貸与など多くの御協力をいただいた。ここに厚くお礼を申し上げます。